

平成22年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

教育支援室

目次

はじめに……………	教育支援室インターンシップ専門委員	出原隆俊（文学研究科教員）	1
1 音楽関係			
1.0	音楽関係インターンシップ概要……………	文学研究科教授	伊東信宏 2
1.1	インターンシップ生を受け入れて……………	ザ・フェニックスホール支配人	藤村治夫 3
1.2	ザ・フェニックスホール インターンシップ報告レポート	[学生からの報告]	
	……………	文学部3回生	音楽学専修 須田木志穂子・森田結香 5
2 演劇関係			
演劇学演習 ピッコロ劇場インターン			
2.0	2011年度演劇学演習「劇場制作」概要		
	……………	文学研究科教授	永田 靖 10
2.1	インターン報告・観劇レポート	[学生からの報告]	
	……………	文化動態論専攻アート・メディア論コース M1	小野紗也香 11
2.2	インターン報告	[学生からの報告]	
	……………	文学部人文学科演劇学専修3回	三島あい 29
3 美術関係			
3.0	大阪市立美術館でのインターンシップ……………	文学研究科教授	藤岡 穰 35
3.1	インターンシップって何？（再録）……………	大阪市立美術館	秋田 達也 37
3.2	大阪市立美術館インターンシップで学んだこと	[学生からの報告]	
	……………	大阪大学大学院	博士前期課程 高志 緑 39
3.3	大阪市立美術館でのインターンシップで学んだこと	[学生からの報告]	
	……………	大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻	博士前期課程2年 露峰 亜希 43

はじめに

本報告書は、平成 22 年度に大阪大学文学研究科および文学部において行われたインターンシップを含む授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加するという形で行われる、授業とは関係のない「インターンシップ」はこれら以外にも様々な場所で実施され、近年は参加する学生の数も増加の一途をたどっていると思われます。それらは私たちに把握しきれぬものではありません。本報告書が扱っているのは、本研究科・学部の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているものということになります。また、CSCD（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）科目「アートプロジェクト入門」の一環として実施されているものには収録していません。

また、開講を予定していたが、希望者がなかったものについては、当然のことながら、収録していません。

最初にその実習先、人数、期間を概観しておきます。

- ザ・フェニックスホール 学部生 2 人 5 日間
- いずみホール 学部生 2 人 5 日間
- 兵庫県立尼崎青少年創造劇場〈ピッコロ劇場〉 学部生・修士課程各 1 人 5 日間
- 大阪市立美術館 博士前期課程学生 2 人 年間ほぼ週一回

本報告書に反映された活動を見ると、本年度も実習先は音楽・演劇・美術という芸術関係の諸施設に、また参加教員・学生も一部の専修に限定されていますが、学生たちにとってはかけがえのない体験であったことが報告から十分に読み取れます。インターンシップの取り組みは本研究科・学部の中期目標・中期計画に明記されてきた事項でもあり、今後とも着実に推進していく必要があると思われます。

最後に、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなご迷惑をおかけしているにもかかわらず、長期にわたるものも含め、積極的に毎年のように学生たちを迎えてくださっている受け入れ先各位に、この場を借りて心からのお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

教育支援室インターンシップ専門委員 出原隆俊（文学研究科教員）

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東信宏

平成 22 年度の音楽に関係するインターンシップは、昨年に引き続き、いずみホール、ザ・フェニックスホールの協力を得て、計 4 名の学生を受けいれいただき実施された。これは、1 学期開講の「音楽学演習」受講生から希望者を募ったもので、4 名はいずれも文学部音楽学専修の 3 回生である。以下の学生からの報告は、両ホールのご意向を勘案し、ザ・フェニックスホールでのインターンシップについてのみ掲載する。

その内容については、以下の報告に詳しいので、ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。

- ◆ 4 月「音楽学演習」の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。その後、研修先の決定。
- ◆ 10 月 19 日（火） ザ・フェニックスホールの事前研修会を文学部にて開催。
- ◆ 10 月 22 日（金） いずみホールの事前研修会を文学部にて開催。
- ◆ 10 月 25～29 日の 5 日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 10 月 26～29 日、および 11 月 1 日の 5 日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 12 月 2 日（木）、ザ・フェニックスホールにおいて報告会を開催。
- ◆ 12 月 21 日（火）、両ホールでのインターンシップについて、音楽学研究室の演習において、学生 4 名が報告。

毎年行ってきたインターンシップであるが、近年は学生の間にも定着しており、年々多くの希望者が現れ、実質的には両ホールに毎年無理を言ってお願いしている状況である。新しい研修先も開拓せねばならない時期に来ている。

受け入れていただいたホールの方々には、今回も大変お世話になりました。研修期間中はもとより、事前研修で大学まで来ていただくこと、その後のケアまで、含めて感謝しております。心からお礼を申し上げます。

1.1 インターンシップ生を受け入れて

ザ・フェニックスホール支配人 藤村治夫

私たちザ・フェニックスホールは本年度も、大阪大学の学生諸君を、インターンシップ生として受け入れました。毎回、さまざまな学習に携わっている方をお迎えしていますが、今回は、私たちザ・フェニックスホールの運営にご協力をいただいている大学院文学研究科の伊東信宏先生のもとで、音楽学を専攻しておられる須田木志穂子さん、森田結香さんの女子学生お2人が来られ、5日間にわたって「音楽の現場」の状況を学んでいただきました。

お2人とも、日常的に音楽に親しみ、また比較的にコンサートにも数多く足を運んでおられ、ホールの果たす役割について、一定以上の理解をしておられたと思われました。インターンシップ終了後の報告会では、お2人の発表を聴き、私たちの伝えようとした事柄を十分に吸収されていることが伝わってきました。

私たちのホールは、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社が CSR（企業の社会的責任）活動の一環で設置・運営する施設であります。社会に貢献する活動を体現する施設であることから、活動にあたっては商業的、あるいは興行的施設とは違った方針を掲げています。会社は、お2人がインターンシップで来られた10月のはじめは、合併によって新会社としてのスタートを切ったばかりでしたが、企業の行う芸術文化支援活動（メセナ）として営まれてきた従来の路線の、さらなる充実を模索し始めた時期でもありました。

そうした経緯の中で、私たちとしては、企業が社会貢献活動の一環で営む音楽ホールとしては今後、水準の高い音楽芸術の発信を根幹に据えつつ、音楽の楽しさをより多くの方々に知っていただくための種々の営みについてご説明を試みました。ホールが主催する事業の中でそれは例えば、金曜のお昼間に比較的低廉な価額で茶菓ともども演奏に親しんでもらうティータムコンサートであり、お話と生演奏を組み合わせたレクチャーコンサートであります。あるいは、本公演の前にお客様に音楽の楽しさを、文字通り体を動かして知ってもらうワークショップや、公開で次世代の音楽家を目指すマスタークラス（講習会）であります。

こうした営みは、通常の公演開催とは異なる業務が発生し、運営には苦勞することも少なくありません。しかし今後、企業の営む社会貢献施設としては、こうした事業を持つことが一層、強く求められるようになっていくものと思われます。その折に必要なのは音楽を深く知り、愛する心と共に、社会や地域の状況を的確に捉え、その中で求められる活動を見だし、事業計画を立ち上げ、着実に実行してゆく姿勢であります。そうした「知・情・意」を併せ持つ人材こそが今、現場で強く求められていることを、インターンシップ生のお2人に感じていただけ

たなら、嬉しいことでもあります。

インターンシップでは、先に述べた主催事業の企画のあり方のほか、広報や券売に関する様々な営み、ホールのファンとしての「友の会」の運営、あるいはホールを外部の主催者の方にご利用いただく「貸し館公演」のあり方など、数多くのテーマでお話をさせていただきました。限られた時間の中では、やや盛りだくさんだったかもしれませんが、お2人には終始、積極的な姿勢で学んでいただけたと受け止めております。今後の活動の中で、この度の経験を活かしていただきたいと願いますとともに、ご活躍を祈ります。

今後も、私たちザ・フェニックスホールをどうぞ、宜しくお願い致します。

(了)

1.2 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告レポート

【学生からの報告】 文学部 3 回生 音楽学専修 須田木志穂子・森田結香

【研修先】

ザ・フェニックスホール

MS&AD ビジネスサポート(株)フェニックスホール事業部

〒530-0047 大阪府大阪市北区西天満 4-15-10

TEL 06-6363-0311

・ホール概要

客席数／ホール 1 階席：標準 186 席（可動）、ホール 2 階席：133 席（固定）

合計：標準 319 席

構造／乾式浮き構造

室容積／2,420 m²

天井高／13m

【研修期間】

平成 22 年 10 月 25 日（月）～29 日（金）

【事前指導】

10 月 19 日（火）に大阪大学構内にて、ザ・フェニックスホールの野村さんからホールについての説明と研修スケジュールについてガイダンスをしていただいた。

【研修最終日の公演】

公演名：ティータイムコンサートシリーズ

小野明子 ヴァイオリンリサイタル

公演日時：平成 22 年 10 月 29 日（金） 開場 13：30 開演 14：00

会場：ザ・フェニックスホール

入場料：一般 3000 円

【研修内容】

第一日目 10月25日（月） 午前9時～12時

- ①ホール職員紹介
- ②ホール施設案内
- ③ザ・フェニックスホールの概要

第二日目 10月26日（火） 午前9時～午後6時

- ①自主企画事業
- ②著作権について
- ③ザ・フェニックスホール友の会組織・運営について
- ④ザ・フェニックスホールチケットセンター

第三日目 10月27日（水） 午前9時～午後6時

- ①貸館公演の受付・インフォメーションの作成
- ②貸館事業
- ③ホームページの運営について
- ④機関誌「サロン」について

第四日目 10月28日（木） 午前9時～午後6時

- ①「小野明子」ヴァイオリンリサイタルの公演概要
- ②自主企画公演・広報
- ③全体会議（打合せ）参加
- ④チラシ挟み込み作業
- ⑤全般質疑応答

第五日目 10月29日（金） 午前9時～午後6時

「公演当日の対応について」を研修テーマとしてホール内準備、リハーサル立会い、公演本番対応等

【報告会】

12月2日（木）にザ・フェニックスホールにて報告会を行った。

【感想】

第一日目

・ ①ホール職員紹介／②ホール施設案内／③ザ・フェニックスホールの概要

ザ・フェニックスホールはビル内部にホールがあるという構造になっており、美術品が飾ってあるエントランスやホワイエ、ガラス張りの「空中劇場」という特色あるホールなど、コンサートに訪れるお客様が少し贅沢な時間を楽しめるような空間づくりがなされていると感じた。ホール内は、可動式の椅子や高さ調節のできる床など、公演に合わせて舞台づくりに工夫ができる構造であった。また、リハーサル室もちょっとしたコンサートに使用できるということで、様々なタイプのコンサートができるようになっていたと感じた。・・・②

メセナ活動の一環としてホールは運営されており、営利を目的とはせずに限られた予算の中でホールのコンセプトに合った企画事業、貸館事業がなされているということであった。自主企画公演にはいくつかのシリーズがあり、梅田のオフィス街にあるという立地条件や公演時間、ホールの特徴など様々なことを考慮してそれぞれのシリーズごとに公演内容を決定しており、幅広い層のお客様が来られるように工夫がなされていると感じた。・・・③

第二日目

①自主企画事業／②著作権について／③ザ・フェニックスホール友の会組織・運営について／④ザ・フェニックスホールチケットセンター

ザ・フェニックスホールは、主に西洋音楽のためのホールであるが、この西洋音楽の現代の日本における位置とはどのようなものか、またそれを踏まえたコンサートの企画についてお話いただいた。演奏会内容ばかりではなく、お客様にその演奏会の日をどのように過ごしていただくかという視点で企画を考えることで、生活の中に西洋音楽を聴きに行くということを取り込むようにしたり、ワークショップと関連して次世代の演奏家や聴衆を創り出す意味合いを併せ持つコンサートの企画があるということであった。これからは芸術だけをやっているわけにはいかない、他の分野と絡めていく必要があるという言葉がとても印象に残っている。ホールは、演奏家に場を提供するだけでなく、みずから演奏会を企画するという側面では音楽文化の担い手でもあり、その場においてはアートマネジメントの考え方が非常に重要であると感じた。・・・①

著作権関連の作業についてはホールの業務として完全に裏方の仕事であるが、このような業務が存在してこそ、きちんと著作権が守られ、音楽に触れるすべての人が気持ちよく音楽を楽しむことができるのだと感じた。・・・②

友の会の会員については、ホールに定期的に来ていただける可能性の高いお客様として力を入れているようであった。チケットの割引や先行予約ばかりでなく、ホール周辺の飲食店でサービスが受けられるという特典には、ここにもまた、生活の中にコンサートを聴きに行くということを組み込んで欲しいという思いが感じられると思った。・・・③

チケット業務においては、自由席や無料のコンサートでの難しさがあるのだと知った。

協賛公演での入場料無料の整理券では、ホールの席数より多くは発券しないという徹底した管理を行っているようであった。加えて、無料の場合でも、お客様で来られなくなった場合に連絡を入れてくださる方もいるそうで、ホールとお客様の間でとても良い関係性が築けているのだと感じた。・・・④

第三日目

①貸館公演の受付・インフォメーションの作成／②貸館事業／③ホームページの運営について／④機関誌「サロン」について

貸館についても内容を重視して事前審査をしっかりとしているということであった。このような審査がホールの質やイメージづくりにつながり、「ホールのファンをつくるようなホールづくり」となっているのだと感じた。また、貸館事業においてもアーティストの方との関係を大切にされており、アーティスト育成の意味もあるのだと思った。・・・①、②

深紅を基調にしたホームページは落ち着いたホールのイメージとあっていると感じた。新着情報からおすすめ公演の詳細情報、貸しホールについてなど多くの情報があり更新は大変そうだったと思うが、公演情報だけでなくチケット申し込みなどもホームページからすることが可能となっており受手側からすると利用しやすいと思った。・・・③

機関誌をもとにチケット作り、チラシ作りなどが始まるということで、重要な仕事だと思った。実際に「サロン」を読んでみるとカラーで見やすく、公演情報や関連インタビューなど情報量も豊富であった。また、最後のエッセイのページでは、演奏家ではない方のお話なども掲載されており、単なる情報誌としてだけではなく読み物としても楽しめるという印象を受けた。・・・④

第四日目

①「小野明子」ヴァイオリンリサイタルの公演概要／②自主企画公演・広報／③全体会議（打合せ）参加／④チラシ挟み込み作業／⑤全般質疑応答

Tea Time コンサートは、友の会のお客様が多く、年間6回の通し券や、60歳以上の方が対象となるそのペア券で聴きに来るお客様が多いということであった。この通し券やペア券は毎回同じ席で聴くことができるという特典があり、自分の席があるという意識で演奏会に来ることで、より特別な気分をお客様に提供することができると思った。・・・①

広報についてお話いただいたことで、新聞や雑誌等のメディア上に演奏会について掲載されるということの大変さがうかがわれた。また、チラシなどの言葉の選び方や言い回しは、メセナであるからこそ万人にわかりやすくということがある一方で、一般の方にとって目新しい企画について簡潔に伝えることは簡単ではなく、その両立は難しいことであると思った。どんなに演奏会の中身がおもしろいものであっても、それを伝える部分で欠け

てしまうことがあれば、演奏会の成功には結びつかない。素晴らしい演奏会というものは、企画の立ち上げから最終的な広報まで、すべてにおいて集中した活動があるからこそ成り立つことなのだと感じた。・・・②

第五日目

今回のような昼間の演奏会では、午前中早い時間から調律やリハーサルなどが入っていて、慌ただしい印象はなかったものの、時間の余裕はあまりないと感じた。

当日最終打ち合わせでは楽章ごとのタイムを連絡することによって遅れ客などのお客様が途中でホールに入れるよう細やかな対応がみられた。車椅子のお客様の席の事前確認や、今回の公演での利用はなかったが託児サービスもあり様々なお客様を受け入れることを想定して臨んでいるということがわかった。

演奏会本番中、ステージマネージャーなどの様子を見学させていただいた。フェニックスホールには、一般的なホールのような袖はないが、衝立などでスペースを区切り、お客さまとの接触が少ないようにされていたこと、また、すぐそばに演奏家のための部屋も楽屋とはまた別に用意されていることなど、演奏家にとって良い環境であると感じた。通常ステージ横の袖は照明が落とされて暗い場所であるが、フェニックスホールにおいては窓もあり、照明もあるので明るいイメージであったことが印象的であった。

Tea Time コンサートということで、休憩中にお菓子とお飲物の提供があるが、お客様と一緒に演奏会に来た方とお話をされながら、休憩中も楽しんでいるように感じられた。公演自体は人気のあるシリーズということもあり多くのお客様が来られていたが、アーティストの方を身近に感じられるような内容になってとてもすばらしい内容だったように思う。

2 演劇関係

演劇学演習 ピッコロ劇場インターン

2.0 2011年度演劇学演習「劇場制作」概要

文学研究科教授 永田 靖

【目的】

演劇学研究室では継続的に兵庫県立青少年創造劇場（通称；ピッコロ劇場）に短期インターンの受け入れを依頼し、実施している。演劇学研究室では演劇研究の一環として劇場での制作業務を体験することを通して、演劇制作の過程をつぶさに観察し、演劇の本質理解に役立てている。

例年、ピッコロ劇団の秋公演の初日までのほぼ5日間をインターン期間としている。通常、この初日までの数日は作品がほぼ完成する時期でもあり、また稽古場から劇場に場所を移す、もっとも現場での動きのある期間でもある。この数日間に、俳優はもちろんのこと、照明や音響、衣装や舞台美術などの劇場での仕込みがなされ、いわゆる最後のリハーサルの「ゲネプロ」も行われる。あらゆる準備が初日に向けて集中するこの直前の5日間に、実際に制作過程を体験することの意義は大きい。

【方法】

まず担当教員（永田）によるオリエンテーションを行う。ピッコロ劇場の梗概の説明、上演作品の簡単な紹介、インターンで研修する具体的内容、研修後の報告についての説明を行う。今年度の作品は、別役実作、佐野剛演出『花のもとにて春死なむ』である。今年度のインターンの期間は、2011年11月7日～12日の5日間である。

その後、演劇学演習の時間に、今回の上演作品についての詳細な解説と分析を行う。この演習は、観劇を授業に組み込んだもので、事前に作品や劇場について学んだ後、受講生とともに上演を観劇し、それぞれの視点から報告をまとめ、それをもとに単位を出している。今年もこの授業で、当該の上演作品『花のもとにて春死なむ』を取り上げて事前の学習をし、初日の観劇を行った。むろん研修中の学生はそれぞれの持ち場で勤務中である。

観劇後には全員上演についてのレポートを書く。インターンの学生はインターン全体の報告書をまとめ、研修先に提出する。

【報告】

以下には、2名の学生の報告を掲載しておく。うち一名については、研修内容についての詳細な報告と、その観劇レポートも合わせて掲載しておく。

2.1 インターン報告・観劇レポート

【学生からの報告】 文化動態論専攻アート・メディア論コース M1 小野紗也香

【ピッコロシアター・インターンに向けて】

いよいよピッコロシアターでのインターンが始まった。

生まれも育ちも尼崎市小田北区で、市内高校の演劇部に所属していた私にとって、ピッコロシアターはまさに地域の身近な劇場である。しかも家から自転車でたった15分の距離にある劇場が、全国の多くの演劇人からも支持されるような、非常に素晴らしい設備を持ったホールであり、また実際にそこで数回の公演をさせてもらった経験があることは、ひそかに私の誇りでもある。しかしそれほど身近な存在であるにも関わらず、恥ずかしながらその運営形態などについてはほとんど何も知らないのである。今回のインターンで、全てを網羅することはかなわなくとも劇場・劇団のマネジメントや日常業務について具体的に学び、ぜひ今後、私が演劇や地域の芸術文化活動に携わる際の糧としたい。

【1日目 2010年11月7日(日)】

スケジュール内容

ピッコロ劇団次回本公演『花のもとにて春死なむ』（作・別役実、演出・佐野剛）についてのオリエンテーション	公演本チラシ、プレスシート、劇団後援会機関紙『into』および新聞掲載記事をもとに、12日からのピッコロ劇団本公演『花のもとにて春死なむ』についての情報を確認。
ピッコロシアター、ピッコロ劇団についてのオリエンテーション(1) ～県立劇団としての特徴～	公演チラシなどをもとに、これまでのピッコロシアター及びピッコロ劇団の活動について学ぶ。 県立の劇団として、ピッコロ劇団は地域づくりの拠点としての性格を持っている。地域の文化振興のため、ピッコロシアター及びピッコロ劇団が特に重点的に取り組んでいると感じた事業を、以下に紹介する。 ・地域連携プログラムへの参加 財団法人地域創造による、3つ以上の地方公共団体による連携事業に対する助成支援を受け、地域における芸術活動の活性化を図る。このプログラムを利用して、ピッコロ劇団は2009年秋の『モスラを待って』公演を岐阜県可児市の可児市文化創造センター、東京都豊

島区のあるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）と提携して行った。こうした試みは、諸経費を各ホール・主催財団で出し合ったり、それぞれの地域で制作した作品を提携する別のホールで上演し合うことで、資金面のみならず人材やノウハウが複数の公共ホールで共有され、各地域の芸術文化活動の振興に寄与するという考えのもとになされている。また、2010年夏の『さらって行ってよピーターパン』公演も、「公共ホール演劇ネットワーク事業」として愛知県豊田市の豊田市民文化会館、千葉県館山市の千葉県南総文化ホールと提携して行われた。いずれの事業においても、演劇公演以外に、次項目で取り上げるアウトリーチ活動を行ったり、地域のボランティアの方に公演時の受付業務などを頼むなど、それぞれの地域の人々と積極的に関わられるよう努めている。

・アウトリーチ活動

アウトリーチ活動とは、観客が劇場に来てくれるのを待つのではなく、劇団のほうから劇場の外へ飛び出し、公演やワークショップをはじめとする様々な活動を行うことである。今年は、『ピッコロ版・銀河鉄道の夜』を兵庫県内の小学校で巡回公演したり、「あつまれ！ピッコロひろば」と題した県内の子ども向け、あるいは先述した提携ホール先の地域におけるワークショップ開催のほか、地域のお祭りなどへも出かけている。

アウトリーチ活動によって、劇場に足を運ぶ機会の少ない客層（ピッコロ劇団では、とくに青少年をターゲットにしている）に演劇鑑賞・参加の機会を提供することができる。

・プロデュース公演

2010年2月16日～21日に上演された『真田風雲録』は、ピッコロ劇団の役者を核としたピッコロ劇団の本公演でありながら、関西で活躍する演劇人から広く出演者を募ったプロデュース公演でもあった。かつては関西でもプロデューサーが一から企画を立ち上げるプロデュース公演が頻繁に行われていたが、どうしても経費がかかるため、近年ではその数がかなり減ってしまった。そうした背景もあってますます演劇＝東京一極集中となり、関西の演劇界がなんとなく元気がない印象を与えているという現状をかんがみ、関西演劇界が盛り返す起爆剤になればと企画されたのが、この公演であった。この企画が関西の演劇界にどれほど影響を与えたかを具体的に計ることはできないが、少なくとも普段は別々の団体に所属している（あるいはフリーの）演劇人が人的ネットワークを広げ、ノウハウを共

	<p>有し、また別の公演で共に仕事をするきっかけを作る場となったようである。同様の試みとして、来年2月の『天保十二年のシェイクスピア』（作・井上ひさし、演出・松本祐子）公演にも、他団体の俳優や演奏家が参加することになっている。</p> <p>私自身はプロデュース演劇の全盛期の様子を知らないので、現状と比べどれほどの勢いの差があるかは解らないが、末満健一の「PEACE-PIT」、石原正一の「石原正一ショー」、田川徳子の「JUIMARC」など、現在関西でもプロデュース公演の試みは少なくないと思う。ただ個人プロデュースで、人員も予算もない中で作っている場合がほとんどなので、作品はどうしても小規模なものになりがちである。その点、ピッコロ劇団は県立の劇団であり、拠点となる劇場も持っているのも、他の小劇団や個人プロデューサーよりも、プロデュース公演を行う潜在能力を持っていると言える。そのポテンシャルを活かし、演劇人が公演を通して出会える場を作っていくことは、少なからず関西演劇界全体の活性化に寄与していると思う。</p> <p>また、プロデュース公演には、観客が様々な団体の演劇人を一度に知ることができるという利点もある。例えば公演を通して気に入った俳優がいれば、観客は、その俳優が所属している劇団の公演にも足を運ぶ可能性が高い。プロデュース公演は観客の演劇ネットワークも構築し、参加演劇人の母集団の顧客創出にも繋がっているといえる。</p> <p>・地域における舞台芸術創造活動の場の提供</p> <p>質の高い芸術作品を提供するだけでなく、地域の人々が自ら芸術活動に参加する機会を作り、創造を促すことも、公共ホールの重要な役割の一つである。ピッコロシアターでは、貸し館・貸しスペースとして市民に施設を利用してもらうだけでなく、狂言教室やオペラ教室、平成演劇教育委員会など、市民が参加できるワークショップ形式の催しを多数行っている。また毎年夏に開催されるピッコロフェスティバルは、市民が普段の芸術活動の成果を発表するまたとない機会となっているし、『さらって行ってよピーターパン』2010年冬公演では、パフォーミングアーツの経験のある子どもを対象にオーディションを行って役者を選出するなど、市民が舞台の作り手として参加できる機会を設けている。</p>
シアター内見学	本館・別館の各設備を、可能な範囲で見学。

	<p>大ホール舞台は客席の2倍の面積があること、舞台の奥行きや袖にかなりの空間的余裕があること、舞台と楽屋・搬入口がフラットに直結していること、充実した資料室が備えてあることなどから、ピッコロシアターがいかに『創造』に重点を置き、作り手側の利便性を考えて作られているかがわかる。この構造の素晴らしさは、実際にホールを使用させて頂いた私も、身をもって経験している。</p> <p>本日は日曜であることもあって、シアター内の全てのホール、練習室が埋まっていた。平成20、21年度の施設利用状況を見ると、全ホール90%以上、練習室も平均85%前後の利用率を誇っており、公共施設としては十分に利用されているといえる。利用者も地元尼崎市や、近隣の伊丹市、西宮市、宝塚市などからの住民が多く、単なる貸し館ではなく地域の公共ホールとして、特に地元の人々によって活用されていると考えられる。</p>
<p>ピッコロシアター、ピッコロ劇団についてのオリエンテーション(2) ～事業に対する助成の状況～</p>	<p>ピッコロサポートクラブの紹介と、公演資金や劇場運営費がどのように賄われているかを、現在の文化事業に対する助成状況を含めて学ぶ。</p> <p>ピッコロシアターや伊丹市の AIHALL などのような公立の公共ホールの収入源には、それぞれの地方自治体からの給付金、各公演のチケット収入、施設利用料があるが、それだけではホールの運営や事業経費をまかなうことはできないので、助成金を得る必要がある。ピッコロシアターが助成支援を受けている団体は、主に文化庁と財団法人 地域創造の2つである。ほかに、事業に応じて尼崎信用金庫などからも助成を受けている。</p> <p>文化庁の「芸術拠点形成事業」は今年度で終了するが、同様の「優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業」が新たに今年から始まり、これにピッコロシアターの「芸術文化活動の普及啓発及び舞台芸術の人材育成事業」も採択されている。この「優れた劇場～事業」は、3つのカテゴリに分けて助成が行われており、一つは複数のホール・団体による共同制作公演に対するもの、残り二つは劇場に対するもので、重点支援劇場・音楽堂に対するものと、地域の中核劇場・音楽堂に対するものである。劇場に対する助成のうち、前者は日本をリードする代表的な施設、後者は都道府県をリードする施設が想定されており、各事業予算の半額が支援され、その上限はそれぞれ8000万円、5000万円である。どの劇場・音楽堂も文化庁の助成なしには運営が非常に厳しいが、採択事業の枠は限られており、小規模</p>

	<p>なホールにとってはかなり厳しい状況であるらしい。</p> <p>財団法人 地域創造の助成も多岐にわたっており、いくつかはオリエンテーション(1)の地域連携プログラムの項でも紹介したとおりである。同財団の助成金は、宝くじの収益金などが財源となっているものもあり、しばしば公演チラシに宝くじ宣伝用の金太郎マークが掲載されているのはそのためである。だが、このマークは大きさ・掲載位置などが厳密に規定され、規定に沿わなければ助成がおりないため、広告デザインを大きく損なうとして異議を唱えている演劇人も少なくない。また、同財団はいわゆる「事業仕分け」の対象にもなっており、芸術文化事業をめぐる助成は、充実・安定しているとはいえない状況である。</p> <p>ほかにピッコロ劇団を支援する団体として、ピッコロサポートクラブがある。年会費を払うことにより、ピッコロ劇団の公演やピッコロシアター自主事業の割引などの特典を受けられる劇団後援会である。この後援会は、ピッコロ劇団が独自に立ちあげたものではなく、同劇団を地域の文化活動を牽引する存在として支援すべく、尼崎商工会議所が中心となって組織したそうだ。この沿革は、ピッコロ劇団が地元の市民にとって、地域の芸術振興のための重要な拠点として受容されていることを示していると考えられる。</p>
<p>『花のもとにて春死なむ』 最終通し稽古見学</p>	<p>別館2階の稽古場にて、『花のもとにて春死なむ』の最終通し稽古を見学させて頂く。見学後、演出の佐野さんより、脚本が扱うテーマや演出のねらいを解説して頂いた。</p> <p>演劇の内容については、観劇実習報告として別にレポートする予定なのでここでは割愛するが、個人的に好きな脚本であったので、本番が楽しみである。</p>
<p>ピッコロシアター、ピッコロ劇団についてのオリエンテーション(3) ～演劇の広報の可能性～</p>	<p>広報に関する概要を学ぶ。演劇公演の宣伝媒体としては、チラシ、雑誌、新聞、車内吊り広告、テレビ、ラジオ、インターネットなど様々な可能性が考えられるが、近年は特に雑誌・新聞を中心とした紙媒体は減少傾向にある。また、車内広告やテレビCMなどは、それぞれの企業がその公演に主催・協賛・後援などの形で関わっているかや、公演にニュース性があるかによって大きく左右される。それぞれの媒体に利点・欠点があるものの、現在でも演劇分野では、観劇時に配布される挟み込みチラシや劇場置きチラシが最も有効な宣伝媒体として機能しており、美術系音楽系の事業と比べると特徴的である。</p>

	<p>また、少しでも低予算で効果のあがる宣伝を行うため様々な工夫がなされている。例えば、新聞の全国版芸術欄の担当者と地域欄の担当者、あるいは学芸部と社会部に別個に会見を行って、断続的に記事を書かせてもらったり、鉄道会社のフリーペーパーに広告を出して駅中にポスターを貼ってもらったり、読者招待券を提供して記事を書かせ、さらに抽選にはずれた人にも優待券を送るなど、劇場に足を運んでもらうための戦略を多面的に展開しているのである。</p>
<p>『天保十二年のシェイクスピア』 台本読み合わせ</p>	<p>2月公演『天保十二年のシェイクスピア』用の、新たにデータ化された台本と原本とを読み比べ、打ち間違いがないかの確認作業。 難しい漢字が多く、文学部学生としては恥ずかしながら苦戦を強いられるが、脚本は刺激的で面白い。</p>

初日の今日は主にピッコロシアター及びピッコロ劇団の概要について、田窪さんから詳しいお話を伺った。内容は上の表にまとめた通りだが、ピッコロシアター・劇団の方針として特に特徴的だと思ったのは、青少年を対象にした活動にかなり重点を置いているということである。社会の高齢化がすすみ、様々なサービスのターゲットが高齢者に移っている流れがあると思うが、そのような中で、若い世代のための参加型事業を積極的に展開している点は非常に好感が持てる。

もうひとつ新鮮な発見は、ピッコロ劇団のレパートリーの幅広さである。私が今まで持っていたピッコロ劇団のイメージとして、『さらって行ってよピーターパン』のようなファミリー向けか、少し真面目な古典劇や新劇が多い、というのがあった。失礼になるかもしれないが、公立の劇団なので、内容的に当たり障りのない作品をするものなのだと思っていたのだ。しかし、今回の『花のもとにて春死なむ』のように観た後に解りにくくてモヤッとした澱が心に残るような不条理劇や、『天保十二年のシェイクスピア』のような挑発的な作品も扱っていることを知り、俄然興味が湧いた。

参考：

文化庁(地域文化振興施策)：

http://www.bunka.go.jp/geijutsu_bunka/chiikibunka/shinkou/sisaku/

財団法人 地域創造(支援事業)：

<http://www.jafra.or.jp/j/guide/support/>

財団法人自治総合センター(宝くじ収益による助成)：

<http://www.jichi-sogo.jp/enterprise/lottery/>

【2日目 2010年11月9日(火)】

スケジュール内容

『天保十二年のシェイクスピア』 台本読み合わせ、修正作業	日曜日の作業の続き。誤植チェックを終えた後、データ修正を行う。完成した台本は、演出の松本祐子さんへ送られる予定である。
チラシ入れ替え、裁断作業	<p>『天保十二年のシェイクスピア』本チラシが納品されたので、劇場各所のチラシ棚をまわり、仮チラシと入れ替える。仮チラシには公演決定を告知するもの（題目、日程、会場、演出家など最低限の情報が載っている）と、出演者が決定した時点で作成されたものの2種類があった。</p> <p>続いて、『花のもとにて春死なむ』公演のアンケートを校正、来年6月の公演『蛍の園』の仮チラシとともに印刷し、裁断する。</p> <p>今公演は1200席を予定しているので、アンケートは1200部、チラシは余裕をもって1400部用意した。裁断機のある印刷系備品の倉庫には、チラシなどを自動で折りたたむ機械や、複数のチラシを一枚ずつ取って1セットのチラシ束をつくる機械などがあつた。</p>
大ホール仕込み見学	<p>大ホールでは、12日の初日に向けて、『花のもとにて春死なむ』の仕込み作業が朝から行われている。私たちが見学に入った午後4時にはすでに装置は組み上がっており、舞台袖での作業とサウンドチェックが行われていた。</p> <p>客席の最前列、最後列それぞれからの舞台の見え方を確認しながら、多房さんより仕込み後の制作の仕事について伺う。</p> <p>制作部は、舞台が組み終わってからの通し稽古・ゲネプロの際、まずあちこちの座席から舞台を見て、客の導線や見切れを確認する。演目によって、観やすい座席・見づらい座席の見当をつけておくことも大切である。一般的にはトチリ席といって、前から7～9列目が最も観やすいとされているが、例えば場転が多かったり、激しいアクションのある演目は、あまり舞台に近い座席からだと見づらくなってしまし、静かで役者の細かな演技が冴えるような演目ならば、前方の座席をすすめることもできる。あるいは全ての座席が埋まる目処が立たなければ、なるべく中央寄りの座席券を優先的に販売し、端の座席は思い切って売り止めるなど、少しでも観客が観やすい座席から観劇できるように気を配る。</p> <p>また客席登場がある演目ならば、客の途中入場を断る必要があるか</p>

	<p>ないかの確認が必要であるし、開演・休憩・終演時間を見込んでレストラン部、プレイガイド部、物販部など各部署に混雑が予想される時間帯を連絡し、段取りをつけてもらわなければならない。</p> <p>こうした、演目によって影響を受ける舞台の外側の様々な要素を調整するのが制作部の仕事なのである。</p>
演劇学校 見学	<p>毎週火曜と木曜に開講されている、ピッコロ演劇学校の授業風景を見学させて頂く。事前に尾西さんより、ピッコロ演劇学校・舞台技術学校の概要を伺う。</p> <p>ピッコロ演劇学校は、昭和 53 年ピッコロシアターが開館して 5 年後の昭和 58 年に開校した。こうした演劇学校は、公立文化施設としては日本初であった。ちょうどピッコロシアター開館後から、平成 8 年ごろにかけては、日本全国でいわゆる文化ホールが続々と建てられたが、いわゆる箱モノ行政との批判を受けるように、それらのホール設備を使用する人材に欠けていた。ピッコロシアターは全国に先駆けて、そうした人材を養成する機関を設置したのである。</p> <p>ピッコロ演劇学校は、演劇初心者を対象に基礎的プログラムが組まれた本科と、本科修了生あるいは修了生と同等の能力を有する人を対象により高度なプログラムが組まれた研究科に分かれている。</p>
(研究科)	<p>本日のテーマは「朗読」。文章のもつ世界観をいかに朗読で表現するかを座学をまじえて学ぶ。軽く体をほぐし発声練習をしたのち、講師の島守辰明さんが「俳優の朗読」において心がけるべきポイントを座学形式で説明して下さったあと、実際に受講生が持ち寄った小説やスピーチ原稿などを順に朗読していく。</p>
(本科)	<p>無声エチュードによる感受性を高めるレッスン。内容は、受講生が 2 人組でそれぞれ稽古場の両端に向かい合って立ち、お互いにアイ・コンタクトでタイミングを計りながら歩き出し、稽古場中央ですれ違ったあと、講師の谷省吾さんの合図で立ち止まり、振り返る。そのあと向き合ったまま再びアイ・コンタクトや相手の表情、仕草などでお互いの関係性を確認し合い、それに基づいてアクションするというもの。わかりにくい説明だが、要はお互いに空気を読み合い、相手のフリを掬い上げて、その場で関係性を構築する練習である。</p>

仕込み見学の際に教えていただいた制作としての仕事内容は興味深かった。制作は来場者と直接関わる部署として、お客様にもっとも近い視線で作品制作の現場をチェックし、よりお客様がより鑑賞しやすいよう様々な気を配っているのだ。また様々な部署との連携も必要で、制作の仕事の幅広さを実感し、いっそう興味が湧いた。

ピッコロ演劇学校は、市民の創造活動に参加したいというニーズに応えると同時に、未来の劇場ユーザーを劇場みずから養成するという点で興味深い。民間にはもっと早くから劇団付きの養成所があったが、こうした養成所はその劇団で活躍する俳優を育てるための機関であるし、生徒もその劇団の理念に同意する者だけが集まるので、どうしても指導に偏りがでてしまう。いっぽうピッコロ演劇学校は様々なタイプの演劇人を講師に招いているので、受講生は色々なメソッドに触れることになり、変なクセのない幅広い演技を学ぶことができるのが強みである。実際の授業風景を見学しても、細かなテクニックよりも、受講生に「表現するとはどういうことか」を本質的に体得させることに重点が置かれているように思った。

【3日目 2010年11月10日(水)】

スケジュール内容

<p>場当たり見学</p>	<p>大ホールにて、『花のもとにて春死なむ』の場当たりを見学。場当たりとは、本番とまったく同じ状態で全シーンを区切りながら通し、照明・音響のキッカケや道具の入りハケ、俳優の立ち位置などを確認することである。通常、場当たりは裏方のキッカケ確認の作業なので、芝居の確認は行われない（セリフなどを飛ばして確認する）が、今回は時間的に余裕があるのか、芝居部分も全て確認しながら進められた。</p> <p>舞台監督・演出家の指示のもと、各種効果のかなり微妙なタイミングまで入念に詰めていく。演出の佐野さん曰く、アメリカでは全て秒数でタイミングをはかるが、日本では今でも伝統的に「呼吸」ではかる場合が多いとのこと（ミュージカルなどではアメリカ式を採用しているところもあるそう）。「呼吸」で合わせることは、それだけ全員が同じタイミングやニュアンスを共有するまでには時間がかかるが、いざというときよりフレキシブルに対応できるのではないかと思う。演劇は変幻の中にあり、本番中は何が起こるか分からない。秒数でのタイミングは、カウントがずれてしまうと上手くいかないが、「呼吸」をつかんでいれば、突発事態によって稽古通りに進んでいなくても、きちんとタイミングを合わせられるのではないだろうか。</p>
<p>チラシ挟み込み作業</p>	<p>ピッコロシアター職員、劇団員、インターン生、そしてチラシを持参した外部劇団の方々、計20人ほどで、チラシの挟み込み作業をする。</p> <p>5台の机を並べてその上に計10種ほどのチラシを置き、一枚ずつ順に拾い上げて束にしていく。チラシはピッコロシアター自主事業、公演関係者（アフタートーク・ゲストなど）の所属団体公演、関西圏の他劇場で行われる公演の順で、それぞれのカテゴリ内で公演日が早い</p>

	順に並べられている。素早く確実に1枚ずつを拾い上げ、綺麗に揃えて束にしていくのは、コツをつかむまで思いのほか難しかった。1時間強で1200部挟み込み終了。
ピッコロ舞台技術学校 見学	<p>毎週水・金曜日に開講されるピッコロ舞台技術学校の講義を見学させて頂く。</p> <p>舞台技術学校は平成4年に開設された、舞台を支える技術者を育成するための学校であり、美術・照明・音響技術を基礎から身につけることができる。演劇学校と同様、実際の劇場で実際の機材を用いて学べるのが強みであり、演劇学校研究科の公演や音楽系イベントの実習も5回予定され、非常に実践的なカリキュラムになっている。</p> <p>今日の授業では機材作業は行わず、兵庫県立芸術文化センターの小山内秀夫さんによる「公立ホールと舞台技術者」というテーマでの講義であった。</p>

場当たりでは、舞台監督さんに着目して見学した。タイムキープをしながら全体の進行を管理し、裏方を統括するのが舞台監督の仕事であるが、それだけでなく様々な担当部署どうしのやり取りをスムーズに結びつける潤滑油のような存在であることに気付いた。例えば1シーンを確認し演出家から役者に変更指示が出た場合、舞台監督は常に両者の間に入って、演出家と役者の意思疎通を助けたり、立ち位置の変更があればバミリが必要か確認したり、何を目印に位置を確認すれば良いか役者にアドバイスしたり、作業が長引いてメンバーに疲れが見え始めると冗談を言って場の空気を盛り上げたりと、細やかに配慮していた。色々なタイプの舞台監督がいるだろうし、ひとえに鈴木田さんの人柄によるものかもしれないが、舞台監督は舞台全体を見回す広い視野と同時に、細部にまで注意を怠らない繊細さも必要なのだと改めて感じた。

そのあとのチラシ挟み込みは、単純作業ではあるが、ふだん演劇を見に行くとかならず貫うチラシの束がこのように作られているのだと、実際に手を動かしながら知ることができて面白かった。次回の劇団公演情報、シアターの次回公演情報、今回の公演に参加している外部の俳優・スタッフの情報、近隣の劇場での公演情報…。チラシは演劇業界で最も効果の高い宣伝メディアであるが、チラシの束からも、その公演がどのようなネットワークの中に位置づけられるかを読み取ることができる。そのことには以前から気が付いていたが、挟み込み作業には実際に外部からの担当者も参加するので、そのネットワークが本質的に人的ネットワークであることを実感することができた。

舞台技術学校の授業見学では、今回の授業では残念ながら、実際に機材を用いて学んでいる風景を見ることはできなかったが、同じ県立の文化拠点である西宮の県立芸術文化センターで行われているアート・マネジメントの概要を、駆け足ではあったが知ることができた。舞台技術学校の受講生は、照明や音響、美術スタッフとしての専門知識を学んでいるわけだが、そうした専門職の人々にも、いまや文化政策やアート・マネジメントの知識は必須であるというこ

とだろつか。

【4日目 2010年11月11日(木)】

スケジュール内容

招待チケット準備	関係者の方々むけに、招待チケットを用意する。枚数などのミスがないよう、ひと組ごとに封筒に入れて分けておく。私たちは、関係者名と枚数が記された紙をひとつひとつ封筒に貼って整理する作業をした。
『天保十二年のシェイクスピア』広報戦略について考える	<p>ピッコロシアターのプロデュース公演は、今年2月の『真田風雲録』以来2度目の企画となるが、今回は「初の試み」というインパクトを失ううえ、シェイクスピアという真田幸村に比べれば日本になじみのない人物の著作がモチーフに使われているため、広報にはよりいっそう特別な戦略が必要だと思われる。どのように宣伝活動を展開すれば、効果的な集客が見込めるか、意見交換をした。</p> <p>シェイクスピア作品を知っていれば知っているほどこの作品も楽しめるという点ではみな一致したので、まず各方面のシェイクスピア学会や研究家に案内をまわすこと、公演前にHPで各シェイクスピア作品の簡単な紹介コーナーを設けることなどが意見として上がった。</p>
Q&A	<p>これまでのインターンシップを通じて私たちが抱いた疑問点を、田窪さんが解説して下さった。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 宣伝美術 <p>チラシのデザインは、デザイナーに依頼することもあれば、劇団員や職員が直接手がけることもあるとのことである。劇団の旗揚げ当初は館長の意向でデザインが固定化されていたが、しだいにデザイナーに依頼することも出てきたという。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 外部から公演に人を招く際の人選の仕方 <p>例えば『天保十二年のシェイクスピア』の場合、演出家の松本さんは東京の人だが、出演者は関西の演劇人である必要があった。そこで、田窪さんらが注目する役者をピックアップしたり、その所属劇団の東京公演情報を案内したり、公演映像を集めて送ったりして、演出家が判断できるようサポートしたとのことである。</p> <p>また、人と人との繋がりも重要で、客演者の紹介でスタッフやデザイナーと知り合い、それをきっかけに仕事を依頼したり共同作業することもある。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・劇団員について（公立劇団の特徴） 劇団員は一年ごとの契約で、給与は基本月給に出演時の公演手当やワークショップ等の指導料などがプラスされる。一年間の仕事ぶりの評価によって契約更新の可否、また給与の増減が判断される。 収入は決して多くはなく、一方で県立劇団の団員として要求される仕事量や質も並ではないが、アルバイトと演劇生活を両立させざるをえない民間の劇団とくらべれば、恵まれた環境が与えられていると言っている。 ・児童劇団の可能性 『さらって行ってよピーターパン』冬公演のように、一般の児童のためにオーディションによって出演機会を設けることはあっても、児童のみの劇団を独立して作ることは、ピッコロ劇団では今のところ予定していないとのことである。その理由としては、公立劇団であるピッコロ劇団には、地域の創造拠点として演劇を創り、その成果をさまざまな別の地域に広げてゆく必要があるが、児童劇団ではその任務を効果的に果たせない可能性があること、あったとしても優先順位は低いことが挙げられる。
『とけないゆき』（作、演出・島守辰明）稽古見学	12月初旬中ホールで公演されるオフオフ 2010『とけないゆき』『女装作家』2本立てのうち、『とけないゆき』の稽古初日を見学させて頂く。 島守さんの、佐野さんとは全く違った演出アプローチが興味深い。例えば演出が手を叩いて芝居がはじまり、次の手拍子でカット、というのが日本では一般的だと思うが、島守さんはそうした合図は一切せず、役者の自由なタイミングで芝居をはじめさせていた。また、一通りのシークエンスを確認してからダメを出す、というやり方ではなく、演じている役者に演出家がポンポンと「ここはこうしたらどう？」「もう少し前に出てもいいよ」とアドバイスをするように指示を投げかけるのである。それに役者も「さっきもこうだったっけ？」「この動きは嘘っぽくないかな」と『役』ではなく素の『役者』として応じ、相談しながら動きを作っていく感じである。ゆえに、演出のダメをその都度台本に書きこんだりすることもない。少しずつ決まっていく動きを、体にしみこませていくような稽古方法だった。
『花のもとにて春死なむ』ゲネプロ見学	明日に公演初日をひかえ、ゲネプロが行われた。本番とほぼ同じ状態での場当たりや通し稽古は既に何度も行っているが、やはりゲネプロともなると役者の気合も違ってくる。皆さん、やりすぎなのではな

	<p>いかと思うほど思いきり動いていた。それに、昨日午後に最後に見学させて頂いた時と比べ、演出がまた変わっている部分があった。あれからまた修正が加わったのであろう、演劇は最後まで答えがない。明日の初日が楽しみである。</p>
--	--

『天保十二年のシェイクスピア』の広報戦略を考える場面では、思いのほかアイデアが出ないので頭をひねった。印象的な音楽が多いので HP に試聴コーナーを設けたりすることも考えたが、制作者に技術と手間暇が要求されることばかりで、なかなか「簡単でお金がかからず効果的」という条件に当てはまるものは思いつかない。しかもホームページ関連は、ホームページを見にくる、ある程度すでに興味を持っている人にしか働きかけられないのがネックだ。『真田風雲録』の際には、真田幸村ゆかりの地（九度山町など）にまで出かけ、広報活動を行ったそうである。単に客を集めるためだけではなく、ひとつの機会を利用して劇団の顧客層を広げ、また演劇そのもののファンも増やしてゆくためには、こうした地道だが全く演劇になじみがない人にも届くような宣伝方法を考えださねばならないと実感した。

『とけないゆき』の稽古見学では、演出家ごとに全く違うメソッドを用いているところが面白かった。私自身は支配的に役者を動かすタイプだが、島守さんの演出方法は演出家と俳優の距離が近く、お互いが意見を言い合える環境があり、稽古場の雰囲気もアットホームな感じがした（本番前はわからないけれども…）。ただ、だからといって馴れ合いの稽古では決してなく、双方が気持ちを切り替えメリハリつけてやっているからこそ成立する演出法だと思った。

【5日目 2010年11月12日（金）】

スケジュール内容

<p>ワークショップ参加</p>	<p>ピッコロ劇団員・穂積恭平さん、広瀬綾子さんによる、トライやるウィークで職業体験しに来ている中学生対象のワークショップに参加させて頂いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手をつないで輪になり、握手を伝達していく。 ・1～30までの数をメンバー全員で数えていく。順番は決められておらず、もし2人以上が同時に数を数えてしまったら1からやり直し。周りを見て、誰かが発言するか・しないかを気配で感じるのがコツ。 ・隣の人目を見て手拍子をし、その合図を受けてさらに手拍子を伝達していく。途中でリバースさせても良い。慣れたら隣の人だけでなく、円内の誰にでも合図を送って良い。最終的にはどこから合図がくるかわからないので、常に拍手の流れを追い、意識のアンテナ
------------------	--

	<p>を広げておく必要がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前のゲームを、拍手のかわりに「わたし」「あなた」で指名する。これも「あなた」が誰に向けられているか注意していなければならない。続いてそれぞれ自己紹介をし、「わたし」「あなた」をあだ名に置きかえて続行。 ・名前おにごっこ。名前を呼ばれた人がオニになり、近くにいる人をタッチする。逃げる人は、自分が狙われていると感じたら、タッチされる前・あるいはタッチされた瞬間に、別の人を指名すれば、オニを変更できる。指名できなければアウトで、輪からはずれる（オニは新たに選出される）。ウォーミングアップにもなるし、次に誰がオニに指名されるかわからないので、周囲に気を配っておく必要がある。 ・ウィンクゲーム。7席の椅子に4人が座り、残り7人は椅子の背の後ろに立つ。空の椅子の後ろに立っている人は、座っている人にこっそりウィンクし、その合図に気付いたら、座っている人は合図を出した人の席に素早く移動する。もともとその後ろに立っていた人は、移動する瞬間にその人の背中をタッチすれば、移動を阻止することができる。自分の席に人をとどめて置いた方が勝ちである。他の立っている人に気づかれずに合図を送ったり、自分の席の人が移動しようとする動きに反応するため、注意力が必要である。 ・だるまさんがころんだ&宝探しゲーム。「だるまさんがころんだ」の要領でチームがオニに近付き、タッチする代わりにオニの「宝物」（今回はガムテープ）を取る。「宝物」を取ったら、オニは振り返るごとに、宝物を持っているような人を指名する。オニが見ている間に動いたり、宝物をもっている人がバレてしまったら、最初から全員やり直し。オニにバレることなくスタート地点まで宝物をはこべたら、チームの勝利である。 <p>宝物を取るところまではうまくいくのだが、初めはすぐに宝物を持っている人がバレてしまう。長時間同じ人が持たないよう順番に回しあったり、さも持っているかのように見せかけたり、メンバー同士固まって誰が持っているか判りにくくしたりと、工夫をこらさなければならない。</p>
<p>県立ピッコロ劇団企画運営委員会会議の会場設営</p>	<p>企画運営委員会とは、県立の劇団として、ピッコロ劇団が今後どのような演目を公演し、どのような活動をしてゆくのかという方針を決定する会議である。机や椅子、ネームプレートを設置し、それぞれの</p>

	座席に資料、封筒、鉛筆、お茶などを用意する。
『花のもとにて春死なむ』 受付業務	もぎり、チラシ配布、場内案内に分かれて受付業務を行う。私は場内案内を担当した。開場前の最終打ち合わせで、誰が何の役割を担当するかや、開演直後は照明が暗いので客止め（お客様の入場案内を見合わせることをすること、どのタイミングで入場を再開させるかなどを確認する。 場内案内は、お客様を笑顔でお迎えし、必要があればお客様を座席まで誘導したり、終演時刻などの問い合わせにお答えするのが仕事である。今回は問題なかったが、場内担当は他にも、携帯電話の使用や飲食・喫煙を注意したり、舞台上がろうとするお客様を止めたり、客席全体に気を配る必要がある。また、開演後に入場されるお客様の足元をペンライトで照らしながら誘導するのも重要な仕事である。
『花のもとにて春死なむ』 初日観劇	1ペルののち席に着き、初日公演を観劇させていただいた。
アンケート回収、会場片づけ	アフタートークののち、玄関前のお客様をお見送りし、アンケートを回収する。30分ほどで客出しが完了したら、モニター電源を切り、公演時間予定表を明日のものに貼り替え、消灯・施錠する。回収したアンケートは劇団にとって貴重な財産になるので、演出家が確認したあとは担当制作が管理する。チケット半券も同様である。

今日は朝から、市内の中学生とともにワークショップに参加した。今回のワークショップは、多くが初心者・初対面であったのと、1時間半という短い時間で行われたので、簡単なゲームを通してメンバーが「目を見て」意思疎通するようになることに主眼が置かれていたと思う。また言葉に頼ることなく、「気配」で状況を読み取ることもポイントであった。それに、もっと根本的なことであるが、こまめにルールを変えたり増やしたりしながらゲームをすることは、新しいルールに即座に対応する柔軟性を鍛えることに繋がるのではないかと感じた。

もっとも面白かったのは、だるまさんがころんだゲームであった。というのも、事前に作戦を打ち合わせたわけでもないのに、一人が宝物を手にとったら全員が「自分が持っているフリ」をしたのである。「あたかも〇〇しているように見せかける」行為は、すなわち演技である。その光景をみたとき、演技というのは、私が思っている以上に自然に、湧きあがるように出てくるものなのだと感じた。もちろん、どの程度それらしく見せることができるかは訓練が必要であろうが、「演じる」ことそのものは、人間によってより本能に近い行動なのかもしれない。また失敗を重ねるごとにチーム側の戦略も高度化していくのだが、これも全員が話し合いなしに、自然に新たな戦略（新たなルール）に対応していた。普段は全く意識しておらず、何度同じ失敗をするんだと頭を抱えることも多々あるが、やはり人間には（動物には）学習能力というものが備わっているのだなあと、不思議に感心してしまった。

また今日はついに『花のもとにて春死なむ』が初日を迎えた。受付業務においては、私だけ場内案内係に任命され、非常に緊張した。座席番号は頭にいていたのだが、事前にチケット文面を見せてもらうのを忘れていたため、一番初めに座席を訊かれたとき座席番号がどこに記載されているか見つけられずに少し慌ててしまった（見れば判だろうと思っていたが、チケットには予想以上にいろいろな情報が載っているものだ）。すぐに穂積さんが来て対応して下さったが、シュミレーションが足りていなかったと猛反省した。しかしお客様へのあいさつは、何とか元気よく笑顔でできていたのではないかと思う。まったく最低限の話ではあるが…。

受付業務が一段落すると、私たちも客席から公演を鑑賞させて頂いた。やはり、演劇というのはお客様が最後のピースを埋めるのだなあと改めて実感。というのも、今回のお芝居は静かで照明も暗めだからか、正直なところ稽古見学のときはどうしてもウトウトしてしまう数分（親方のおかみがハナの首に縄をつけて出てくる件）があったのだ。本はかなり好みなのに、いつもそのあたりで集中力が切れて解らなくなってしまうので、困ったなあと思っていたのだが、本番では一度もそんな心配はなく、ただただ舞台に引き込まれた。ゲネプロと比ベミスも多少あったし、お客様の咳払い、衣擦れの音、様々な雑音が入って、集中して観劇するには不向きなように思える環境なのだが、なかなかどうして様々なことに思いを巡らせながらじっくりと芝居を見ることができたのである。「観客の気配」というものが、観客自身にもこれほど影響を与えているとは思わなかった。

【まとめ ～5日間のインターンシップを通して～】

合計5日間という短い時間で学べたことは、舞台制作の仕事のなかのごくごく一部だけだったが、それでも実際に業務に携わる機会を与えられたことで、外から眺めるだけでは気付かなかった多くのことを吸収できたと思う。特に制作部は、チラシやポスター制作のように目に見える（形に残る）大きな仕事から、座席からの見え方をチェックしたり各部署の連絡の橋渡しをするような目に見えないこまごまとした仕事まで、本当に幅広い領域で立ち回り、それぞれの公演、ひいては劇団全体をサポートしなければならない。5日間ちょっとした仕事を手伝っただけで軽々しくこんなことを言うと叱られるかもしれないし、制作の仕事の果てしなさ・大変さは重々承知しているつもりではあるが、それでもやはり、それぞれの作業はとても楽しかったし、もっと色々な仕事をしてみたいと思った。

ピッコロシアターやピッコロ劇団の活動に関しても、今まで漠然としか知らなかった概要を詳しく知ることができ、「近所の有名な演劇ホール」という認識であったものが、芸術創造拠点の公立ホール・公立劇団としてどのような役割を果たしているのか、よりいっそう具体的に理解を深めることができた。せっかくこれほどの施設があり、精力的な文化活動が行われている（市内の文化施設や活動はピッコロシアターに限ったことではない）のに、いまだに尼崎が近隣の市民から文化都市としてのイメージを持ってもらえていないことは残念でならない。ピッ

コロ劇団は県立なので、当然県レベルの活動範囲を求められるため、本拠地だからといって尼崎市だけにかまけているわけにはいかないだろうが、これからも夏公演の『あまに唄えば』のように、地元との結びつきの強い作品を扱ってもらえると、尼崎市民としては嬉しい限りである。市政の側も、都市イメージ向上のために、もっとこのシアターや劇団の存在を利用して良いのではないかと思う。何だかぼやきようになってきてしまった。

最後に、5日間のインターンシップを通して最も強く印象に残ったことは、月並みな言い方かもしれないが、シアター・劇団職員の方々の熱意である。というのも私は、演劇に限らずプロフェッショナルというものは、仕事は仕事と割り切って、すこし距離をとりながらクールに仕事をこなしているイメージを持っていた。恐らく「仕事」とは、しんどくても我慢して嫌々やらなければならないこと、という固定観念があったからであろう。しかし職員・劇団員の方々と演劇についてお話したり、仕事ぶりを拝見していると、皆さんが本当に演劇（芸術）が好きで、自分の仕事に対しても誇りを持っていらっしゃるのが伝わってきた。もちろん全ての仕事が好きなわけでも、それがいつでも楽しいわけでもないだろう。プロである以上、私のイメージ通り、仕事に対して冷静な態度が必要な場合もあろう。けれども、本質的に「楽しく働く」ことは可能だということ、むしろ自分の仕事を楽しめなければ良い仕事はできないということ強く感じたのである。就職に暗い展望しか抱いていなかった私には、勇気づけられる思いがした。今後の就職活動や仕事をする際には、今回学んだことを一つの指標にしたいと思う。

【観劇レポート】

不条理演劇の物語は、筋道の通らない、道理に合わない展開をみせるものであるが、不思議といわゆる「リアリズム演劇」以上に鋭く、人間の存在や営みの本質に切り込んでいるように思う。というのも、不条理の世界では、「ルール」が「事実」に先行するからだ。

例えばこの『花のもとにて春死なむ』では、ハナが背におぶっているものは座布団であることは誰もが知っている「事実」だが、それを子どもとして認識することはこの世界での「ルール」である。同様に、コンカイ和尚の甥が殺すのは本物のコンカイ和尚を殺した者でなければいけないから、甥に刺された親方は和尚を殺したことになり、親方を殺す動機のある人間といえ、かつて親方に土地を奪われた女でしかありえないので、その女と同一人物であると思われている遊女は、親方を殺したことにならなくてはならないのである。

こうしてみてゆくと、不条理劇の「見・非論理的な展開は、実はそれなりの「ルール（道理）」に基づいていることがわかる。これは言わば「共同体のルール」とでも言うべきもので、その場にいる者はすべからず従わねばならない。不条理劇は道理のない物語なのではなく、特殊な道理に則って導かれるものなのである。遊女の「ここではそうなるよ」や、ハナの「あなたたちがそう思っていると思ったから、私もそう思わなければならないと思った」という台詞などはまさに、登場人物がここで適用されるルールの異常性に気付きながらも、彼らがそのルールに従わざるを得ない、そう求められている（と感じている）ことを表わしている。

いわば、「sollen (shall)」の世界なのである。この「sollen ((他の意向によって) ~すべきである)」的意識は、カフカ作品にも頻繁に見受けられる。いわゆる不条理劇の知識が少ないので断定はできないが、恐らく他の作品にも同じような意識が「不条理」の共通事項として存在しているのではなかろうか。

この「ルール」に基づく「sollen」の世界こそが、私をして不条理劇にひそむリアリズムを感じさせたのである。人間のコミュニケーションは一定の「ルール」に基づかなければ成り立たず、意思疎通とはまさに「sollen」の連続であり、その繰り返しによって新たな「ルール」が組みかえられ人間関係を構築するからである。ある共同体の中で生きるために人は、それがどれだけ奇異に思えても「共同体のルール」を意識的無意識的に読み取って従おうとするし、一旦「ルール」に取りこまれてしまえば、それに抗うことは困難なのである。

さて「共同体のルール」の中でも重要な要素の一つに、本作品のテーマでもある「死」の扱いがある。世界のどの共同体にも、死者の弔い方に決まりがある。埋葬や供養のやり方にとどまらず、例えば遺体を放置したとしても、そういう「ルール」なのであれば、「共同体の弔い」として成立する。日本では、村八分にされた人間でさえ、火事と葬式の時だけは公平に扱われた。もちろん共同体の安全や衛生を守るためでもあるが、こと葬式に関しては、死ねば全てが許されるという考え方があったのだろう。はじき出された「個」は死をもって「共同体」へ還ってゆくのである。

公演の冒頭から流れているチンドン屋のようなメロディは、まさに「共同体における死」を連想させるものであった。というのも、黒澤明監督作品『夢』の「水車のある村」における葬列の音楽を思い出したからである。「水車のある村」では、葬式には村人が総出で音楽を奏でながら練り歩き、良く生きぬいた死者を称えて明るくにぎやかに送り出す。「死」は生きている限りその概念を理解し得ないために、誰もが少なからず恐れを抱くものであるが、死後に誰かがこうして弔ってくれると思えば、いくらか不安も和らぎ、安らかに死に臨むことができる。遊女が、多くの人を見守る中で制止する手を振り切って死にたいと言うのには、そうした安心感を得たいという思いがあったのだろう。その姿を見ていると、つい先日ある男性が自分の自殺の一部始終を U-Stream 配信したというニュースを思い出した。本人が煽った面もあるそうだが、男性は自殺をにおわす書き込みをしていた 2ch 掲示板で、他のユーザーから「早く死ね」などの自殺教唆的コメントを浴びせかけられながら、複数のウォッチャーが見ている中で首を吊ったとのことである。そこには制止の手も弔いの言葉もなく、あったとしてもネットの波の中にあつという間に流されてしまったのであろう。インターネット上の見ず知らずの他人にさえ死を見届けてもらおうとする、さびしさと自己顕示の錯綜する人間心理をつきつけられた思いがした。同時に、現代では「死」してなお「個」は「共同体」に還ることなく、いつまでも孤独なままなのかと、暗澹たる思いに包まれた。

2.2 インターン報告

〔学生からの報告〕

文学部人文学科演劇学専修3回 三島あい

【11月7日（日）】

インターンシップ初日のこの日は、担当してくださった田窪さんから、ピッコロ劇団の概要を伺った。県立劇場付属の劇団は兵庫と静岡にしかないらしい。県立劇団というと、他の民間の小さな劇団と比べると、専用劇場もあり金銭的な助成もあるので優遇される面が多く恵まれているのだろうというイメージがあった。しかし、劇団としての集客・収益の良さを考えるだけではだめで、地域に根付いた活動・地域活性化のための活動などもしなければならず、縛りがあり不自由な部分もあることを知った。東京の良い作品を買い付けてきて、利益を出さず安く観客に提供するというような、地方発信・受け入れのシステムを行ったり、小学校などで公演し地域に演劇を広めるアウトリーチ活動を行ったり、またはワークショップの開催など、純粹に公演だけをこなすだけではいけないようだ。演劇公演だけでも、2ヶ月の公演を年間9本と、かなりハードなスケジュールをこなさなければならず、常に疲弊した状態だそうだ。インターンに行かせていただいている間にも、役者の方は公演の稽古、小作品の稽古、ワークショップ、地域イベントへの参加など、事務方の方は、先々の色々な公演の準備を同時に進行していらして、想像以上に目まぐるしいほどの数の仕事をこなしていることに驚いた。

県立劇場としては、文化庁からの劇場に対する助成と、地域創造財団からのプログラムに対する助成があると伺った。だが、その文化庁からの助成というものも、劇場のランクによってふるい分けされ、現在政府で行われている仕分けの対象にもなるなど、資金面での苦労は絶えないようだ。いかに宣伝費を安く抑えるかということで、テレビでCMを流すなど大きな宣伝は難しく、チラシを基本に、新聞に記事を書いてもらったり、新聞や雑誌などの読者プレゼントなどを活用するそうだ。チラシも、最近ではデザイナーにデザインしてもらうそうだが、劇団の方が作ったりもするようで、安くて効率の上がる宣伝方法が他にもないだろうかと考えてしまう。私の地元では、ローカルの情報番組などに出演して、バレエ教室の発表会なども宣伝していたので、そういう方法が関西でもないのだろうかと思った。

また、この日は劇場内を見学させていただいた。資料室はかなり充実しているらしい。事務室の方には、過去の公演の写真、チラシや小道具を写真に撮って記録したものなどを置いてある部屋があった。楽屋数などは少し少ないかなと感じたが、この劇場の売りは、収益よりも創り手をメインにした劇場ということで、客席の倍の広さの舞台であること、楽屋や搬入口から舞台が近いことを5日間の内何度も説明していただいた。確かに、楽屋や搬入口から近く、しかもフラットな位置にある舞台というのは、出演者からも裏方からも楽で良いと思う。集客・収益だけを考えるなら客席を多くした方が良いが、一番見映えがする比率のホールにしているというのも、素敵な考えだと思った。

作業としては、この日は次の公演の、台本にする前の誤字・脱字のチェックをした。大変だったが、私がやったのは前半部分だけなので、後半がそういう話なのか気になる。こういった地味で大変な作業に、舞台が支えられているということを改めて感じた。

今回の舞台の通し稽古も見学させてもらった。稽古場はちゃんとリノリウムが敷いてあって、そんなに広くはないが、やはりプロの劇団ともなると稽古場もちゃんとしていた。壁などがすべて黒に塗られていたのが、どういう意味があるのか少し気になった。正直、稽古を見てもまったく作品が理解できなくてどうしようと思っていたが、演出家の方が「わからないでしょう？」と言って下さったので、そういうものなのだと思って安心した。

【11月9日（火）】

この日は前日の作業の続きを終わらせてから、演出家の方に送るためにファイルを修正した。それから、公演当日に配布するアンケート用紙のコピー・裁断をし、劇団員さんを通してのチケットの手続きのやり方を教えてもらってから、劇場の仕込みの見学をさせてもらった。

仕込みの引率をしてくださった田房さんから、制作の人間としての舞台の見方を教えていただいた。演目によっての客席からの見方や、座席の売り方、どこの席を観客に勧めるかなどを考えながら通し稽古やゲネプロを見るようにしていると伺った。例えば、場面転換の多い演目ならば、目まぐるしくなく全体を見られるように後方席を勧めるだとか、今回のようにセットが動かない舞台ならば前列も見やすくして良いだろうだとか、そういう心遣いをするのも大切な仕事なのだなど知った。大ホールはオーケストラピットとしても使えるように前列が可動式になっているそうで、今回の舞台では一列目が取り払われていた。ただ、あまり広くないホールなので、オケピのために席を取り払ってしまうとかなり席数が減ってしまうのだろうなと思ってしまった。また、装置や小道具を置く場所などはテープなどを貼って目印をつけておくイメージがあったので、そういうのがないことにも驚いた。

夕食後からは演劇学校の見学ということで、先に説明を受けた。本科・研究科と2クラスあるピッコロ劇団の演劇学校・舞台技術学校は、公立では初めての演劇学校だということだ。劇団付属の養成所というものは、その劇団の特色が強いところが多いらしいが、ここの演劇学校はどこの劇団・劇場でも使える役者・スタッフを育てたいという考えの下、様々な講師を招いて幅広い指導を行っているという説明だった。技術学校の方も、実際の舞台で実際の機材を使っての上演練習が出来るというのが、専用劇場のある強みらしい。ドイツやフランスではこうした芸術に対する国の援助が強く、文化力＝国力とおっしゃっていたが、私もそう思う。そういうところにもっと力を注ぐべきであるのに、事業仕分けの対象として援助が削られたり、大きなホールが閉鎖に追い込まれたりしているような日本はまだ国力が足りないし、発展していかないのだと考える。

私も舞台に立っていたので、クラスの見学はとて興味深かった。研究科の方は「俳優のための朗読」という授業をしていて、作家の語り口を取り込んだ上に役者の表現が加わるこ

とで個性を出すというようなことをしていた。言い回しや解釈もだが、やはりその空間を自分のものにするということが、舞台の上で観客の視線を惹きつけるためにはとても重要だと思い、勉強になった。

本科では、ランダムな2人組で即興の演技をするという授業をしていた。アクションを起こすタイミングというものがあり、ひとつのタイミングを逃したら、次のタイミングではより大きなアクションを起こせば良いというのが、なるほどなあと感じた。相手の表情を見て空気を読まなければいけないので、難しそうだった。

【11月10日（水）】

場当たりの見学をさせてもらった。役者さんは衣装を来てメイクもして、音響・照明もつけて、台詞も言いながら立ち位置や出る幕を確認していた。自分がしていたダンスのときは、移動と立ち位置を確認するだけだったので、場当たりは時間のかからないものだと思っていたのだが、何度も繰り返して同じ場面を確認したりしていたので、演劇はやはり流れなども大切なのだろう。大道具の桜の木の枝や、紐をかける位置まで細かく確認をしていたのも少し驚いた。装置に関しても役者さんの位置にしても、演出の人たちが客席の端から端まで移動して見え方を確認していたので、本当に細かいところまでのチェックが舞台を作り上げていることを実感した。しかし、やはり稽古場と舞台の大きさが違うからか、出のタイミングや歩幅など、かなり修正をしなければいけないようで、こんな直前で色々と動きが変わるのは少し大変そうだった。照明はあまり気にならなかったが、音響さんはタイミングなどをかなり修正されていたので、それまでの通し稽古などでは音は入っていなかったのかということが驚いた。きっと、もっと歌が多いミュージカルのような作品のときはまた違うのだろう。

この日は作業としては、チラシの折り込みをした。いつも舞台やコンサートで配られるチラシ類は邪魔だと思ってすぐその場で捨ててしまったりするが、実際に作業してみると手間がかかっていることがわかって、少し捨てるににくくなってしまった。他の劇団などからもチラシが持ち込まれていて、こうしてお互いに劇団や会社同士の協力が芸術の発展には欠かせないものなのだということもわかった。

夜には舞台技術学校の授業を見学した。外部から講師の方を招いて、劇場やホールについての講義だった。音響や照明といった技術だけではなく、日本のホールなどの歴史や実情なども学ばなければいけないようだ。装置を扱う技術やホールの構造など、どこか理系な雰囲気のある授業を想像していたので、こういう講義も大切なのだなと思った。その中で、ホール数は年々増えているが、その維持費や事業費などは変わらないどころか減っているという事実と、ホールの職員も、民間は専任の職員が多いが公立ホールだと公演のあるときだけの非常勤職員が多いという話を聞いて、日本という国の、文化・芸術への関心の薄さが窺えると思った。

【11月11日（木）】

柿落とし二日前のこの日は、招待分のチケットの封入作業をした。また、別の公演のスタッフさんに送付するちらしの発送作業も行った。衣装や音楽などを依頼する会社やスタッフさんは、同じ会社や人が多いようだ。同封する文書は、誤字・脱字などがないかどうか、作成した人とは違う人がチェックを行っている。社会人はそんな細かいところまできちんと確認を重ねなければいけないのだと知った。本番前はあまり私たちに出来るような仕事はないようで、この作業の後は田窪さんに色々質問をさせていただきながらお話を伺ってから、別の公演の稽古を見学させてもらい、ゲネプロの見学をした。

ピッコロ劇団は、6、10、2月の本公演と8、12月のファミリー劇場が大きな公演で、その間にオフ・オフなど小さな公演が行われている。公立劇団であることから、地域性がやはり重要で、関西発のプログラムであったり、地元ネタを取り入れたプログラムを作ることも大切らしい。そのためには、劇団内に演出家を作るということも必要ということで、今回の作品も劇団の佐野さんが演出を任されていた。東京に頼らず公演ができ、また県内外で活動することが出来るというのが、劇場が劇団を持っている強みだという。

宣伝や美術は公演ごとに人が替わり、劇団員がデザインすることもあるそうだ。劇団初期の頃はデザインはノーギャラだったというから驚いた。

劇団員の方は、県立劇団でも公務員ではなく、年俸制の契約を結んでいるそうだ。ただし、県職員の給与が上がれば団員も上がることはあるらしい。こうして保障されているからこそ、演劇をしているだけではだめなのだとおっしゃっていた。それは公立劇団だけでなく、今は民間の劇団でも助成金を受けていれば同じようなかんじだそうだ。

前から気になっていた、チラシに載せる役者さんの名前の順番は何を基準にしているのかを伺ってみた。ピッコロ劇団では大体座歴が多く、他には台本の登場順やあいうえお順というものもあるそうだ。今回、1人だけ役者さんの名前が載っていなかったのも聞いてみると、チラシを作成するまでに配役が決まっていなかったらしく、それを聞いて疑問が解消された。他にも、例えば落語なら写真の大きさや、写真の頭の高さを変えるなど、チラシ一つにも色々気を遣わなければならないことがたくさんあることがわかった。写真の大きさや、名前順には色々あるのだろうと思っていたが、頭の高さを気にするというのは初めて知った。

それから、劇団によくある付属の児童劇団は創ったりしないのかという質問をしたところ、プロの劇団なので児童劇団は創らないということだった。問い合わせは多いようだが、劇団の子供だけのためになってしまわないかとおっしゃっていて、私にはまだよくわからなかった。私のように舞台が好きな人は、近くにそういう環境があれば良いと思うし、それも地域への貢献の仕方の一つかもしれないが、確かに劇団に所属する子供に時間をかける分、ワークショップなどは減ってしまうかもしれないし、難しい。

そして、次に企画されている『天保十二年のシェイクスピア』という作品は、ピッコロ劇団だけでなく、外部からオーディションで役者を集めたり客演で呼んだりして関西全体の活性化を図る公演だ。客演など選ぶ基準は、ただ演技が上手いだけではなく、やはり集客出来

る人や話題性も大切なようだ。

オフ・オフの稽古見学は、この日から立ち稽古を始めたばかりということで、動きなどは稽古の中で動きながら更正を重ねていく。こんなふうにして一つの作品が出来て行くのだというのを見られて良かった。

『花のもとにて～』は、一度通し稽古を見ているので台詞や展開、役者さんの動きもわかっていたが、ゲネプロで照明や音が入ると全く雰囲気が変わって、飽きずに見ることが出来た。通し稽古や場当たりのときとかなり動きも変わっていて、一日でここまで変えて対応出来るのが、やはりプロの役者さんは違うなと思った。ゲネプロではビデオも撮っていて、これは記録用でもあり、また宣伝に提供したりもするためのものらしい。

【11月12日（金）】

午前中は劇団員さんのワークショップに参加させてもらった。中学生を対象にしたこのワークショップは、色々なゲームを通して、身体を動かすこと、周りの人との連携や状況判断など、即興に必要な要素がたくさん詰まっていて、とても楽しかったし頭も使って面白かった。中学生たちも楽しんでいて、こういうことから、舞台に興味を持つ人が増えてくれたらいいなと感じた。

またそのときに、講師をされていた役者さんに、舞台人として大切だと考えていることを伺ってみた。お1人は、舞台の上で楽しんでいることがとても大切だとおっしゃっていて、もう1人の方は、日常生活では言えない台詞・できないことを、恥ずかしげなく堂々とやっている人は輝いて見えるとおっしゃっていた。私も将来舞台に立ちたいので、参考になったし、答えていただいたことを大切にしていこうと思う。

ワークショップ後は会議の会場設営をして、本番は会場でチケットのもぎりをさせていただいた。チケットやチラシの渡し方一つでも、お客様のことを考えて行動しなければならぬのが勉強になった。

一つ気になったのは、ピッコロ劇団の公演ではパンフレットを作らないのかということだ。以前『モスラを待って』を見たときも思ったが、役者さんと役が一致させられないのが少し残念に思う。どういう人がどの役をやっているか、そういうのがわかった方が見やすいし、役者さんへのファンもつきやすいのではないかと考えた。それが劇団のファンやサポートクラブなどに繋がる面もあるのではないかと思う。

私は、今まで自分が舞台に立つ側だったので、いわゆる裏方の仕事を知らずと思ってこのインターンシップに参加したが、5日間を通して、こうしてたくさんの方の様々な仕事に支えられて一つの舞台が出来ているのだということを改めて実感出来た。表に立つ人だけでは出来ないのは当たり前だが、実際にどのような仕事があるか体験出来たり知ったり出来たことが良かったし、役者さんたちのプロ意識を身近に感じられたことも良かったと思った。今まで以上に周りに感謝する気持ちを持ちたいと思う。

また、県立劇団ということで、地域に根差した活動やワークショップといったものはあるのだろうと思っていたが、地元を題材に、劇団員がネタを集めてきて作品を創ったりなどは、予想以上だった。こうした劇団が増えていけば、日本の芸術の発展にも繋がっていくのだと思う。

3 美術関係

3.0 大阪市立美術館でのインターンシップ

文学研究科教授 藤岡 穰

報告者が開講している東洋美術史演習「仏教美術の理論と実践」(通年・集中)は、主に日本・東洋美術史を専攻する院生を対象に、美術作品のフィールド調査などを不定期に実施し、調査研究の実践力を身につけることを目的としている。また、美術研究のうえでは大学などの研究機関と両輪をなす、博物館施設におけるインターンシップへの参加も奨励しているが、その受け皿として利用させていただいているのが大阪市立美術館のインターンシップである。2010年度には2人の院生が応募し、採用された。

大阪市立美術館のインターン(研修生)制度は、2008年度に創設されたもので、近畿一円の大学院で美術史を専攻する学生若干名のインターンを受け入れ、学芸員育成のための研修を行っておられる。以下に、その募集要項を抜粋する。

1) 募集趣旨

大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン(研修生)を募集します。

2) 研修内容

常設展、特別展を中心に学芸業務全般に関して、当館学芸員と共に携わっていただきます。

3) 受入対象

大学院在学中もしくは修了者で、美術史や美術・文化に関連する分野を専攻する者、または同程度の能力・経験を有する者。

4) 受入人数

若干名

5) 研修場所 / 期間

大阪市立美術館ほか

平成22年(2010)5月中旬～平成23年(2011)3月31日 [10ヶ月程度]

6) 研修日 / 時間

原則として、週に1日程度

9:30～17:00 [昼休み1時間程度]

7) 受入条件

インターンの報酬は無償とします。

交通費/食費は支給しません。

8) 応募方法等

エントリーシート

小論文 課題「大阪市立美術館インターンシップで学びたいこと」1200字程度

9) 選考

応募書類と面接により選考します。

10) 修了証

規定時間[250時間]、研修を修了した方に対し、修了証を交付します。

大阪市立美術館のインターンは、一人の学芸員のもとでその補助業務を担当することを原則とし、特別展や常設展、普及事業など、各学芸員がその年度に担当する仕事に共に携わる。ほぼ1年間にわたり継続的に行われる研修は、それゆえ責任も大きく、大学院生にとってもかなりの負担になる。しかし、それぞれの学芸員の方のご配慮（大変なご負担）により、単に補助的な業務に終始するのではなく、美術史研究のうでも有意義な、本当の意味での育成をしていただいております、とても貴重な経験の場となっている。この場を借りて、ご担当の学芸員の方々に感謝申し上げます。

3.1 インターンシップって何？（再録）

大阪市立美術館 秋田 達也

大阪市立美術館では、2年前よりインターンシップ制度を導入している。インターンシップとは、おもに学生を対象とした体験就業のことであり、さまざまな職種において行われている。

近年、美術館や博物館においても実施されるようになってきたが、まだあまり知られていないようであるので、ここのその活動について紹介したいと思う。まず、当館の募集要項に記された趣旨をご覧ください。

「大阪市立美術館では、将来学芸員をはじめ美術館に関わる仕事に就くことを希望している方を対象に、人材の育成と当館の活動をより広く理解していただくことを目的として、インターン（研修生）を募集します。」

通常のアパートが賃金を得ることが主目的であるのに対し、基本的に無給（交通費・昼食費も自費）であるインターンシップは、「就業体験を得ること」や「自分の適性を知ること」に主眼が置かれている。美術館への就職を希望する学生であれば、展覧会をはじめとする多様な業務を通して学芸員の実態に迫ることのできるよい機会だろう。

当館の場合、基本的に学芸員1名にインターン1名がつくというかたちを採用しており、週1回程度（年間300時間、約40日）、期間は4月～翌年3月までの1年間としている。お互いの都合がよい日程を事前に打ち合わせ、担当の学芸員によって違いはあるが、できるだけインターンの方々がそれぞれの専門分野に近い仕事に関われるよう配慮している。昨年度、私が受け持った方は、幕末明治の大坂の絵師たちを研究する大学院生だったので、大坂画壇関係の所蔵品と一緒に調査し、最終的にその成果を常設展の1室で発表してもらった。もちろん、他にも様々な作業をしてもらったが、写真や図版ではなく本物の作品を直に見ることや、作品選定、キャプション・解説の執筆、展示・撤収作業など、学芸員として最も基本的な作業にひと通り携わることは少なからず意味のあったことと思う。

インターンへの対応は、受け入れる学芸員にとっても時間的な負担となることは確かである。作品を調査してもらうにしても必ず立ち会わなければならない、なかには一緒にやるよりも自分でやってしまったほうが早い仕事もある。しかし、ともに作品を調査することで、あらためて作品と向き合う時間を確保することができ、雑務に忙殺される学芸員にとって本来の学芸的な時間を取り戻せるよい機会ともいえる。また、そういった調査で蓄積されるデータは美術館にとっても貴重な財産となる。

もちろん、この制度にも少なからず問題はあつた。日常、学芸員がしていることとはいえ、断片的な雑務ばかりをしてもらうようでは、インターンとは名ばかりの無償の労働力になってしまう。また、いくら賃金を得ることが主目的ではないといつても、交通費や昼食費の支給など経済的な負担の軽減も考えていかなければならない課題である。一方、インターンにも明確な

目的意識を持つことが求められる。ただ漠然と学芸員が指示することをやっているだけでは得るものは少ないだろう。授業など受身に聞いているだけでは身につかないのと同様である。将来、自分が学芸員になった時のことを想定し、積極的な意識で参加する姿勢が望まれる。

そのようなお互いの意識のズレを防ぐ目的もあり、当館ではインターン日誌というものを毎回記入してもらっている。研修内容とそれに対する感想・意見などを書いてもらい、学芸員が目を通すという簡単なものではあるが、日々の活動をお互いに見つめなおす作業は、インターンシップ制度の本来の目的を忘れないためにも大切なことといえるだろう。

当館の活動は、ようやく2年目（初出より修正）を迎えたばかりであり、まだまだ試行錯誤の段階である。美術館とインターン、双方にとってメリットになることは何なのか、多くの方々からご意見をいただきながら、よりよい制度・活動にしていきたいと考えている。

3.2 大阪市立美術館インターンシップで学んだこと

〔学生からの報告〕

大阪大学大学院 博士前期課程 高志 緑

はじめに

本インターンは、平成 22 年 5 月から平成 23 年 3 月まで大阪市立美術館に受け入れていただき、一人の担当学芸員の方のもとで日々の学芸業務の一端を体験させていただくというもので、大変興味深い内容であった。書類審査と面接を経て受け入れが決まると、大阪市立美術館学芸員の齋藤龍一氏から、約一年間という長期にわたりご指導をいただいた。

インターンの具体的な中身は、受け入れ先の学芸員の方のご専門及び今年度担当されるお仕事の内容、また学生側の研究テーマや学業上の条件を考慮に入れて進められる。担当学芸員の方は今年度の秋から冬に、二部屋分の常設展を受け持たれることになり、そのお手伝いをさせていただくこととなった。私の現在の研究テーマは中国南宋から元時代に制作された仏教絵画であり、常設展はこれを中心に計画されることになった。齋藤龍一氏は中国の仏教彫刻がご専門であるが、昨年度担当された企画展「道教の美術」のご経験から、近年注目されつつあるこういった分野の絵画にも通じておられ、お互いに関心の高い内容の常設展であったと思われる。この常設展を通して、実に多くのことを勉強させていただいた。

その他の期間についても、ご担当の仏像の常設展の展示・撤収や他館からの作品返却に立ち会わせていただいたり、書庫にある過去のあらゆる展覧会の図録から評価の定まっていない中国・朝鮮絵画を探し出す作業、他の学芸員の方ご担当の企画展の展示作業の手伝い、収蔵庫燻蒸の様子の見学、新規寄託品の調査など、さまざまな体験をさせていただいた。本報告書では、主に常設展にかかわる内容とその他の内容に分けて振り返ってみたい。

常設展について

この度かかわらせていただいた常設展は、2010 年 11 月 20 日から 12 月 23 日まで行われた「中国・朝鮮半島の仏教絵画」、「日本の仏教絵画—釈迦と羅漢・高僧—」であった。常設展では、変化の少ない館蔵品と寄託品を組み合わせるとどのような展示をするかという切り口が問われるが、「中国・朝鮮半島の仏教絵画」は今まであまり並べたことのない作品ばかりだったので、非常に意義深いものだったと思われる。続いて隣室の「日本の仏教絵画—釈迦と羅漢・高僧—」も、中国の影響を色濃く受けた日本の仏画の作例を取り扱っており、その意味で関連性のある展示であった。常設展のタイトルに始まりそれぞれのテーマ、作品選定や配置図など、計画のほとんどは学芸員の方が行われたが、収蔵庫や写場で作品を直接見て陳列の可否を決める作業やキャプションの作成、会場に設置する配布資料に印刷する解説の執筆、展示室に作品を並べる作業についてはかかわらせていただいた。

準備は開催期間の二ヶ月前から始まった。今回の常設展は、当館でもあまりされたことのない試みであったので、まず館蔵・寄託品リストに載っている作品と収蔵庫に眠っている作品と

を照合し、写真データのないものについては写真撮影、法量を計るといった作業を繰り返した。こうして展示ごとにこまめにデータを取り、初めて向き合う作品には調書を取っておくことが重要であるということがよく分かった。なぜなら、まずは館蔵・寄託作品の把握が新たな常設展、企画展の源であり、より安全に作品を取り扱うための情報源であるからである。このように展示ケースに並べられそうな作品を選びすぐり、個々の作品を関連付けて部屋ごとのテーマを確定する作業と、作品の配置図を作成する作業は、ほぼ同時平行に行われる。作品が決まれば順次キャプションと解説を書いていく。キャプションには英訳が必須であるが、独特の仏教用語など訳しにくいものは学芸員の方にも手を貸していただき、お手数をおかけしてしまった。キャプションの横に並べる作品解説は担当学芸員の方が書いて下さったが、私は会場に設置される配布資料に印刷される作品解説を書かせていただいた。この時代の中国・朝鮮特有ともいえる、多様化してそれぞれに発達した仏教理論を絵画化した作品は往々にして複雑で、現在もなお解明されていない部分は多い。一般の方が作品に向き合えるだけの分かりやすい解説がいかに難しいものであるかを実感した。

実際に展示ケースに陳列するに当たっては、作品の安全を第一に、観覧者から作品がよく見えるようにケース内での位置を調整したり、ライティングや導線など、空間全体に配慮した展示を行った。事前にある程度計画していても、実際に展示してみると変更を余儀なくされることが多く、円滑に作業を進めるためにも代替案を用意しておいて柔軟に対応することが求められると分かったのも、現場ならではの体験であった。注意点も多く気を遣う作業ではあるが、先ほどまで何もなかった部屋で着々とケースが完成し会場が出来上がっていく様子は感動的でした。その作品が存在することによって空間の雰囲気ががらりと変わってしまうという、美術作品の持つ存在感を初めて肌で感じた気がした。

展示期間中には二度ほど展示室を訪れ、自分のかかわらせていただいた展示を客観的に見ることができた。また所属研究室の多くの方々も個人的に展示を見に来て下さり、貴重なご意見やご感想を頂いたこともずいぶん励みになった。個人的には、中国の宋元明清の仏画、朝鮮半島の仏画など、個性的な作品を一つの展示室としてまとめるための導入の解説パネルがなく、作品と観覧者との距離を縮める予備知識を提供する工夫が足りなかったのが反省点である。会場に設置される配布資料も、展示ケースの独特の雰囲気に比べて部屋の隅の目立たない場所にあり、一般の観覧者に気づいてもらえなかったもので、目に付く場所に変えるべきであった。欲を言えばきりが無いが、今にして思えばもう少しがんばって今回分担させていただいた以外の解説もなるべく多く挑戦していたら、より勉強になっただろうと思われる。

その他の業務について

○ 寄託品の調査

よくいわれる一般的な学芸員の業務には、美術作品の調査・研究、収集・保管、教育・普及と、展覧会等の企画・立案・展示・撤収があるが、普段のスケジュールは展覧会を中心に組まれる傾向にあり、さまざまな雑務に追われる環境のもと、社寺や個人からの寄託品の調

査・研究や所蔵品の整理が立ち遅れている場合がある。そのため、先述したように機会を見つけてこまめに調査をすることは大切である。展示室で作業をする際には、作業の安全性と効率性が求められるので、保存状態をじっくり観察するのは調査の場でなければならない。写真でも分かることについては記録写真を撮り、今後の研究のために整理しておくことが望まれる。当館にはこの冬新たに寄託品に加わった作品があり、その作品の調査にかかわらせていただいた。なお、寄託品を抱える美術館では所蔵者や所蔵作品に関する情報などを適性に取り扱わなければならない。もちろんインターンも同じである。

○ 彫刻作品の展示と撤収

担当学芸員の方のご専門が仏教彫刻であったので、彫刻作品の展示や撤収には何度も立ち合わせていただいた。大きくて重さのある立体作品は取り扱いもライティングも絵画に比べて難しく、美術館と提携している運送業者の方を指揮しながら力を合わせて展示や撤収をされる様子を見ると、普段何気なく見ていた展示室が、いかに工夫を重ねられたものであるかということに気付く。例えば担当学芸員の方のこだわりは、部屋の出口がすぐに見えないようにケースを配置し、あくまでも仏像が部屋の中心であることを感じさせる導線や、本来崇拜の対象である仏像を普通の人間の目線よりやや高い位置に置き、なおかつ背の低い子どもや車椅子の方にも作品が見えるように、大小の台を階段状に積んだ上に作品を並べるといった展示方法である。

展示や保管の設備に関しては、建物の新旧や予算の関係上、館ごとの格差は仕方がない部分もあるが、その時点で良いとされる設備を知った上で、所属する館の条件の中で可能な限りの努力を行う姿勢は大いに学ぶべきところである。

○ 図録、図版の確認

はじめにも触れたように、担当学芸員の方は昨夏に開催された「道教の美術」という企画展を手掛けられたが、それに先立ち仏教絵画の範疇で捉えられず、道教の範疇で捉えられる全国の美術作品を、過去のあらゆる展覧会の図録から探し出す作業を行われたようである。このたび私は何日かかけて、それに似た作業を体験させていただいた。仏教・道教に限らず解釈の難しい絵画、今までにほとんど見かけたことのない中国・朝鮮・日本の絵画をピックアップして延々とコピーをとる作業である。少しマイナーな館や展覧会の図録に載っていることがある、とコツを教えていただいたが、慣れるまではかなり時間がかかり、大変な作業であった。実際に企画展を企画・立案する際や出品リストを考える際にこういった段階を踏む必要があるのだろうとうすうす感じたが、図録の山を前に自分の知識不足を痛感した。コピーをとった中に担当学芸員の方が興味を惹かれるものもいくつかあったことが、せめてもの慰めである。その中には、現在伝えられている名称が本来の絵画の機能と異なっている可能性のある絵画も一部含まれており、改めて残されている課題の一端を見せていただいたようである。

おわりに

今年度は担当学芸員の方が企画展を受け持っておられなかったので、秋の常設展を中心に比較的じっくり取り組ませて頂いた。企画展に伴う一連の作業、例えば出品作品の所蔵先とのやり取りや図録の制作、広報や金銭面のやりくりなどは書類を見せていただいたりお話を伺うまでにとどまったが、終始感じたのは、学芸員とは質の高い学術的な仕事に加えてあらゆる仕事をこなせる専門職であり、唯一無二の作品を後世に伝えるため安全に作品を取り扱えることや、いつでも誰でも芸術作品を鑑賞できる場・一般市民の学習の場としての美術館で、一般と学界の間の橋渡しをすることが期待されている。企画展には、その分野の最新の研究成果を紹介するもの、研究の進んでいない部分について問題提起を行うもの、あまり知られていない分野について紹介するもの、身近なテーマを新しい角度から捉え直すものなどさまざまな形があるが、これらのことは常設展においても考えられるのではないだろうか。また、これは館蔵品・寄託品ともに豊かな質と量を誇る当館だからこそ感じられたのだろう。

文学部の中でも特に美術史学にとっては現物の作品が第一次資料であり、美術館はまさに現物を扱う場所である。大阪市立美術館のインターン制度は、美術館博物館の学芸員を目指す私にとって大変有意義な機会であった。この一年で学ばせていただいたことは、どれ一つをとってもそこでしか学べない貴重な経験であった。それらは今後あらゆる場面で生かされていくと確信している。

お忙しい中、一学生のために貴重な時間を割いてご指導下さった齋藤龍一先生をはじめ、温かく声をかけて下さった篠館長、お世話になった学芸課の皆様には厚く感謝申し上げます。

3.3 大阪市立美術館でのインターンシップで学んだこと

〔学生からの報告〕 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻 博士前期課程2年 露峰 亜希

はじめに

今回1年間、大阪市立美術館に於いて、2010年度インターンシップとして、作品展示の仕方や作品の取り扱い方などの学芸業務を学ばせていただいた。博物館学や博物館実習の講義・実習を受け、また学芸の方々のお話を伺うなどして、学芸業務に関して漠然とどのような作業を行うのかということ勉強していたつもりではあったが、実際にインターンとして展示に携わらせていただく中で、現場にいななければ気付かなかった具体的な作業内容や流れを身をもって学ぶことができたのではないかと思う。

私は、インターンシップに応募する際、「常設展(日本近世・近代絵画)」を希望し、学芸員の秋田達也氏御指導のもと、下記の常設展示の補助をさせていただいた。

- ・常設展示「草花のいろどり」(2010年6月11日～6月20日、7月6日～7月19日)
作業内容：作品選定、キャプション・作品解説作成、展示・撤収作業の補助
- ・常設展示「怪(あやかし)ーお化けの世界ー」(2010年8月3日～9月5日)
作業内容：作品選定、キャプション・作品解説作成、展示・撤収作業の補助
- ・常設展示「日本近代洋画」(2010年8月3日～9月5日)
作業内容：展示・撤収作業の補助
- ・「描かれた動物たちー近世写生画ー」(2010年10月9日～11月14日)
作業内容：企画担当、作品選定、キャプション・作品解説作成、展示・撤収作業
- ・「近世文人画」(2010年11月20日～12月23日)
作業内容：作品選定、展示作業の補助

本レポートでは、これらの展示に関わり、学んだことや感じたことを述べていきたいと思う。

展示作業について

インターンシップを始める際に、実質的な経験を通し、展示を行う上で特に学び、習得したいと考えていたことは、作品の取り扱い方、キャプション・作品解説の執筆方法、展示方法の3点であった。

作品の取り扱い方は、主に掛軸を中心に、注意点を教えていただきながら、何度も実際に巻く・掛ける等の作業をさせていただいて学んだ。近代洋画の展示の際には、額縁の扱い方を教えていただいた。箱紐の結び方や、巻子の巻き方等、実際に作業させていただく上で慣れることが必要であったため、非常に良い機会をいただいたと思う。

キャプション作成では、フォントや字の大きさなどのバランスを考え、展示室全体で統一し

た。ルビや英訳や所蔵作品・寄贈作品・寄託作品などの事項も必要な情報である。

また、作品解説では、鑑賞者に分かりやすく、作品の制作背景や見てほしいポイントを限られた字数で伝えるという点が難しく感じられた。そして、展示内容によって言葉遣いを変更するという事は、解説の文章を考えることで精一杯であった私には、気付けぬ点であった。例えば、「妖—お化けの世界—」は、夏休み期間中に開催され、展示内容からも鑑賞者の年齢が低くなることが予想できた。私は、原在中筆「百鬼夜行絵巻」の全体の解説と部分的な解説を担当したが、妖怪の説明を付すと漢字が多くなりすぎ、読みにくい解説となった。そこで、「子どもが読みやすい解説に」と御指導いただき、訂正したが、それでも難しい言葉が多かったのではないかと思う。鑑賞者の立場になり、様々な視点から考える必要があることを実感した。

また、単純な展示にならぬよう、解説でも工夫できることに気付いた。「怪—お化けの世界—」では、原在中筆「百鬼夜行絵巻」や伝土佐行秀筆「化物草紙」の絵巻の展示を行った。メインである「百鬼夜行絵巻」では解説の分量を多くし、「百鬼夜行絵巻」、「化物草紙」の両作品には、作品全体の解説の他に、数箇所に説明を付けることで、どこに何が描かれているのかが分かりやすく、また物語の内容も伝わりやすくなった。一つ一つ丁寧な作業を行い、展示に工夫を凝らすことの重要性もまた体感することができた。

展示に関しては、展示の流れを現場で体験できたこと、特に実際に展示を企画から担当させていただいたことは、大変貴重な経験であった。

私が担当させていただいた「描かれた動物たち—近世写生画—」を企画する際、まず始めに、テーマ決めを行った。私の専門分野が近世絵画であり、特に円山派を研究していたため、その周辺の絵師たちの展示を行いたいと考えた。そこで、所蔵作品・寄託作品の中から、18～19世紀に円山派、四条派、原派や森派に描かれた作品をリストアップすると動物絵画が多く、作品を実見させていただくと、絵師の違いによる表現方法の相違点、色濃く表れている流派の特徴、大阪画壇と京都画壇の違いが確認できたこと、また親しみやすいテーマであることから、楽しめる展示になるのではないかと考え、動物絵画の展示を行うことに決めた（展示内容に関しては、資料1～資料4参照）。

実見した作品の中から、展示室に見合うであろう件数にしぼり、作品配置を考えた。何パターンか考えた上で、配置を決め、実際に展示を行った。展示室に入った時、真っ先に目に入る場には、インパクトの強い作品を展示すると良いと教わり、関蓑洲筆「象図」を配置した。この点だけにおいても、随分展示室の印象が変わった。

展示室の構造上、もう一点作品が必要となり、急遽、作品を一点増やすことになったが、作品同士の間隔が狭くなり、窮屈な展示になっていたのではないかと思う。実際に展示してみないと分からないことも多いが、展示室全体のバランスや作品の大きさなど、事前にしっかり意識すべきだと痛感した。

また、展示を見てくださった大阪大学大学院の橋爪節也教授から、「原在中筆「孔雀図」六面は、四面と二面に分けて展示をするべき」と御指導いただいた。本作品は、襖絵であり、確かに襖として機能していた際に、同じ一室の同じ面に設置されていたとは考え難かった。作品解説だけ

ではなく、鑑賞者がより見やすく、分かりやすいように、作品の確かな情報を伝えられる展示方法を考えるということ学んだ。

その他には、照明の位置や明るさによって作品の見え方が全く異なること、展示する作品によって、またその配置の仕方によって全く異なった展示になること、作品を展示する高さによって、作品の印象が変わることを実感することができた。

実際に展示を行うことによって、自身の中でも気付いた点や反省点があったが、様々な方々から展示に関する御意見や御感想をいただき、大変勉強になった。

終わりに

1年間、美術館という場で学ばせていただき、研究室にいただけでは分からなかった様々なことを勉強できたのではないかと思います。

上記の展示方法以外にも学んだことはたくさんあるように感じる。美術館の現状や場の雰囲気、特別展開催までの様子などを自分の目で見ることができ、他館への作品の貸出・他館からの作品の返却・特別観覧に立ち合わせていただき、作品調査に同行させていただくなど、様々な経験をさせていただいた。

何より近くで学芸員の方々の作業を拝見している中で、とても印象深かったことは、展示や作品に対する丁寧さや妥協しない姿勢であった。一通りの作品展示が終わっても、作品配置について考え、何度も作品の配置を変更したり、照明を変えては作品の見え方を確認したり、とても丁寧に作品を取り扱われていたり、作品の高さ調節や歪みの確認を納得いくまでされていたりと、当然のことかもしれないが、作品への配慮、展示へのこだわりが強く感じられた。このような姿勢を近くで拝見し、美術館で働く上で大切なことを教わったように思う。

修士論文を抱えていた私にご配慮くださりながらも、多くの経験をさせてくださり、御指導くださった学芸員の秋田達也氏、また様々なことをお教えたくださった学芸員の方々に心より御礼申し上げたい。

資料 1. 「描かれた動物たちー近世写生画ー」キャプション・作品解説(※ルビは省略)

①鶏図 中島来章(1796~1871) 江戸時代(19世紀) 本館蔵

Cock and Hen

Raisho Nakajima (1796-1871)

Osaka Municipal Museum of Art

中島来章は、19世紀の円山派を支えた中心人物である。師は、円山応挙の子である応端と言われているが諸説ある。本図は応挙や応端が遺した図とほぼ同じ図様で、雄鶏と雌鶏が描かれ、その周りには金砂子が撒かれている。鶏の黒目の周りにピンク、雄鶏の尾羽に青と緑、羽根の一部には金泥が入ってアクセントとなり、雌鶏の羽根の模様にも繊細な表現が見られる。

②鼠図 白井直賢 江戸時代(18世紀) 本館蔵

Mice

Shirai Naokata, Edo period, 18th century

Osaka Municipal Museum of Art

白井直賢は、写実を重んじた円山応挙門下の1人である。鼠を描くことを得意とした。鼠は大黒天の使いであり、子宝の象徴でもある。本図には、羽箒に集まる鼠3匹の様子が描かれている。鼠の黒々とした目は黒漆で盛り上げられ、光沢をもつ。鼠のか細く小さな手、耳の形や尻尾に見られる細かな毛描きからは、鼠を注意深く観察した上で描かれたことが窺える。

③猫図 原在正(?~1810) 江戸時代(19世紀) 本館蔵(田万コレクション)

Cat

Hara Zaisho(?-1810)

Osaka Municipal Museum of Art, Taman coll.

1匹の猫が、草の上で丸まり、気持ち良さそうに寝ている。猫の側には蓮華草が咲いており、春の穏やかな様子を感じさせる。原在正は、原派の祖である原在中の長男であり、在中に絵を学んだ。後に三海家に養子に入るが、33歳の若さで亡くなった。賛者の藤原公説(四辻公説、1780~1849)は、江戸時代後期の公卿で、代々琴や箏を家業とする四辻家の当主である。

④孔雀図 原在中(1750~1837) 文化5年(1808) 本館蔵

Peacocks

Hara Zaichu, dated 1808

Osaka Municipal Museum of Art

岩上に停まる孔雀1羽と、3羽の飛翔する孔雀が墨のみで描かれている。画面右上から左下へと対角線上に順々に孔雀が描かれ、大きく羽を広げた孔雀が悠々と飛んでいる様子が表現されている。本図のように、孔雀が飛んでいる図様は珍しい。原在中は、石田幽汀や円山応挙の影響を受け、中国絵画や土佐派を学習し、原派の祖となった江戸時代の絵師である。

⑤牡丹孔雀図 岸駒(1749~1838) 天明5年(1785) 本館蔵

Peacocks and Peonies

Ganku, dated 1785

Osaka Municipal Museum of Art

岸駒は、江戸時代中期に京都を中心として活躍した画家である。写実を旨とし、岸派の祖と

なった。本図には、孔雀と牡丹の花が描かれる。当時、円山四条派を中心に、孔雀がモチーフとして度々描かれていたが、岸駒も孔雀図をよくした。その繊細な描写や濃麗な彩色は、沈南蘋風である。「天明乙巳」とあることから、天明5年（1785）の制作であることが分かる。

⑥鷲図 西山芳園(1804～1867) 江戸時代(19世紀) 本館蔵(小田栄作氏寄贈)

Eagle

Nishiyama Hoen (1804-1867)

Osaka Municipal Museum of Art, Gift of Oda Eisaku

⑦松に鸚鵡図 西山芳園(1804～1867) 江戸時代(19世紀) 本館蔵(小田栄作氏寄贈)

Parrot in A Pine Tree

Nishiyama Hoen (1804-1867)

Osaka Municipal Museum of Art, Gift of Oda Eisaku

本図には、松の枝に停まり、下方を見遣る一羽の鸚鵡が描かれる。あっさりとした淡墨で表現された松と、色鮮やかな鸚鵡が対照的であり、鸚鵡の存在が際立っている。鸚鵡の羽には金泥、足には胡粉が用いられており、羽根の毛まで繊細に描かれている。西山芳園は、大坂出身の絵師。花鳥画を得意とした松村景文に画を学び、人物画、花鳥画をよくした。

⑧象図 関蓑洲(?～1875) 慶應2年(1866) 本館蔵(倉田陽三氏寄贈)

Elephant

Seki Sashu, dated 1866

Osaka Municipal Museum of Art, Gift of Kurata Yozo

文久3年（1863）に、インド象一頭が日本に来航し、難波で慶応元年（1865、一説に慶応2年）、見世物となった。本図は、「慶應丙寅春桃花節」とあることから、慶應2年（1866）3月に描かれていることが分かり、鼻の裏側、背の毛描きや足の表現からも、この象を実際に見て描かれた可能性が高い。作者の関蓑洲は、鎌田巖松に絵を学んだ大坂の画家である。

⑨月に狼図 上田公長(1788～1850) 江戸時代(19世紀) 本館蔵(小菅長次郎氏寄贈)

Wolf and The Moon

Ueda Kocho (1788-1850)

Osaka Municipal Museum of Art, Gift of Kosuga Chojiro

月下を歩く一匹の狼が描かれる。月や雲は外隈で表わされ、狼の目と口に淡い色が入っている。狼が開いた口には牙が見え、爪は鋭く尖り、丸々とした目がこちらを見ているようである。

月はもうすぐ満月になろうとしており、狼のやせ細った肢体や月にかかる霞が、より一層不気味に感じられる。上田公長は、大坂出身の画家。呉春あるいは松村景文に絵を学んだ。

⑩牡丹孔雀図 上田公長(1788～1850) 江戸時代(19世紀) 本館蔵(小菅長次郎氏寄贈)

Peacocks and Peonies

Ueda Kocho (1788-1850)

Osaka Municipal Museum of Art, Gift of Kosuga Chojiro

⑪月に鹿図 森徹山(1775～1841) 江戸時代(19世紀)

Deer and The Moon

Mori Tetsuzan (1775-1841)

⑫寒月狸図 森徹山(1775～1841) 江戸時代(19世紀) 本館蔵

Raccoon dog and the Moon

Mori Tetsuzan (1775-1841)

Osaka Municipal Museum of Art

狸が単一モチーフとして描かれるようになったのは、江戸時代中期以降である。動物絵画を得意とする森派の1人である森徹山は、狸をよくした。本図には、狸の後ろ姿が描かれ、「鹿に月図」同様、徹山の得意とする構図であったようである。徹山は、森周峰の実子であるが、狙仙の養子となり、初め周峰と狙仙に画を学び、後に円山応挙の門人となった。

⑬猿図 森狙仙(1747～1821) 江戸時代(19世紀) 本館蔵

Monkeys

Mori Sosen (1747-1821)

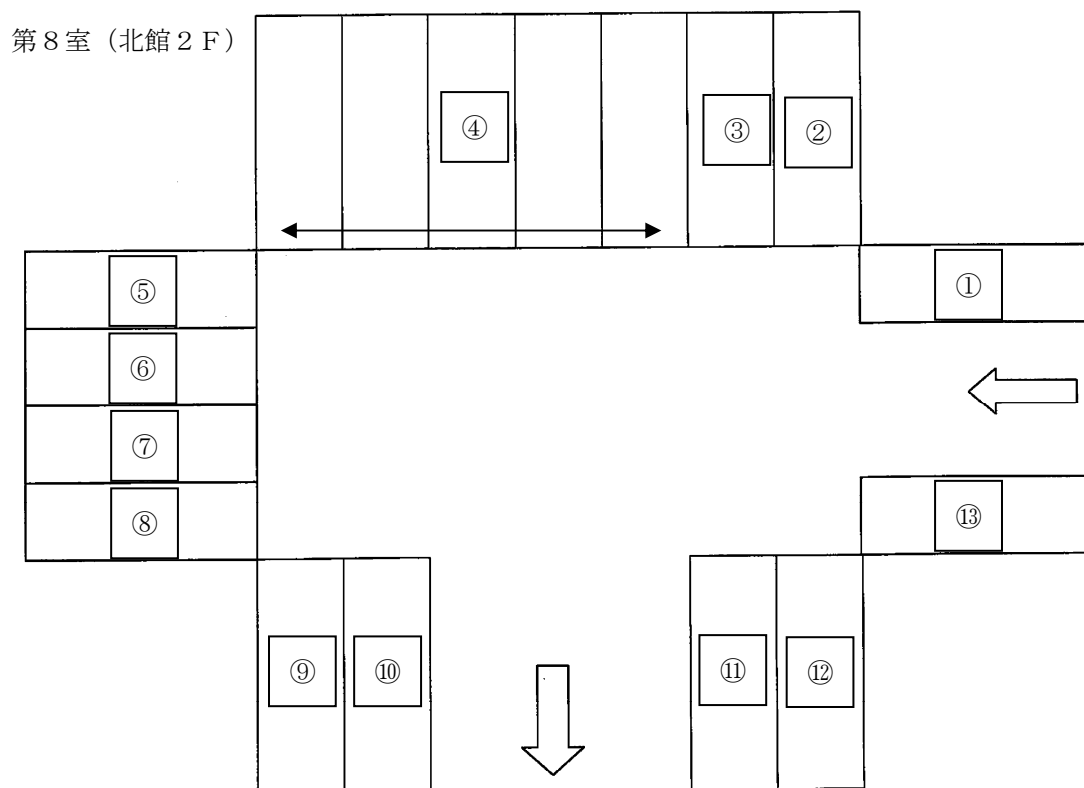
Osaka Municipal Museum of Art

森狙仙は、江戸時代の大坂画壇を代表する画家。動物を描くことを得意とし、特に猿の絵師として有名である。初め「祖仙」と号したが、後に「狙仙」と改めた。本図では、一匹の猿は毛繕いを行い、その猿の背にもたれかかる様に手を置くもう1匹が左上を眺めている。猿の柔らかな毛並みに加え、葉脈や葉の裏側を描くなど、細かな工夫や技術の高さが窺える。

資料2. 「描かれた動物たち—近世写生画—」展示紹介

原在中や中島来章など、写生派の作品を中心に江戸時代の絵師たちが描いた動物絵画をご紹介します。絵師によって異なる動物の表現をお楽しみください。

資料 3. 北館 2 階第 8 室 「描かれた動物たち—近世写生画—」 作品配置



資料 4. 「描かれた動物たちー近世写生画ー」 展示リスト

常設展示リスト 平成 22 年 10 月 9 日～11 月 14 日 大阪市立美術館

第 8 室 描かれた動物たちー近世写生画ー

鶏図	中島来章 (1796～1871)	1 基	江戸時代	本館蔵
鼠図	白井直賢	1 幅	江戸時代	本館蔵
猫図	原在正 (?～1810)	1 幅	江戸時代	本館蔵 (田万コレクション)
孔雀図	原在中 (1750～1837)	6 面	江戸・文化 5 年 (1808)	本館蔵
牡丹孔雀図	岸駒 (1749～1838)	1 幅	江戸・天明 5 年 (1785)	本館蔵
鷲図	西山芳園 (1804～1867)	1 幅	江戸時代	本館蔵 (小田栄作氏寄贈)
松に鸚鵡図	西山芳園 (1804～1867)	1 幅	江戸時代	本館蔵 (小田栄作氏寄贈)
象図	関叢洲 (?～1875)	2 曲 1 隻	江戸・慶應 2 年 (1866)	本館蔵 (倉田陽三氏寄贈)
牡丹孔雀図	上田公長 (1788～1850)	1 幅	江戸時代	本館蔵 (小菅長次郎氏寄贈)
月に狼図	上田公長 (1788～1850)	1 幅	江戸時代	本館蔵 (小菅長次郎氏寄贈)
月に鹿図	森徹山 (1775～1841)	1 幅	江戸時代	
寒月狸図	森徹山 (1775～1841)	1 幅	江戸時代	本館蔵
猿図	森狙仙 (1747～1821)	1 幅	江戸時代	本館蔵